

やがい みんぞくはくぶつかん
ようこそ野外民族博物館リトルワールドへ

かつどうしゅし
活動趣旨

リトルワールドは、1983(昭和 58)年に開館した、世界中のさまざまな民族の文化や暮らしぶりを紹介する博物館です。人間は数百万年の進化の後、それぞれ与えられた環境の中で、生存と繁栄のために、生きるための技術、意思を交わすための言語、社会のしくみ、他の民族との関わり、自然観や世界観などに知恵をはたらかせてきました。文化とはどれもこうして培われてきた人間の知恵の結晶であり、これら文化をより身近なものとして体験・理解しようというのが当館の趣旨です。そのためにリトルワールドでは、学術的な調査研究をもとに、世界各地の家屋、生活用具などの収集、保存、解説、展示をしています。

現在地球に暮らす私たち人間一人類、ヒトは、ひとつの種、同じ生き物—動物—ですが、ずいぶん違うところもあります。人間一般がもつ共通性と民族や地域ごとにある多様性は、人間の特徴のひとつです。

リトルワールドでは、本館展示室と野外展示場という2つの展示を通して、「人間とは何か?」ということについて、みなさんに考えていただきたいと思っています。

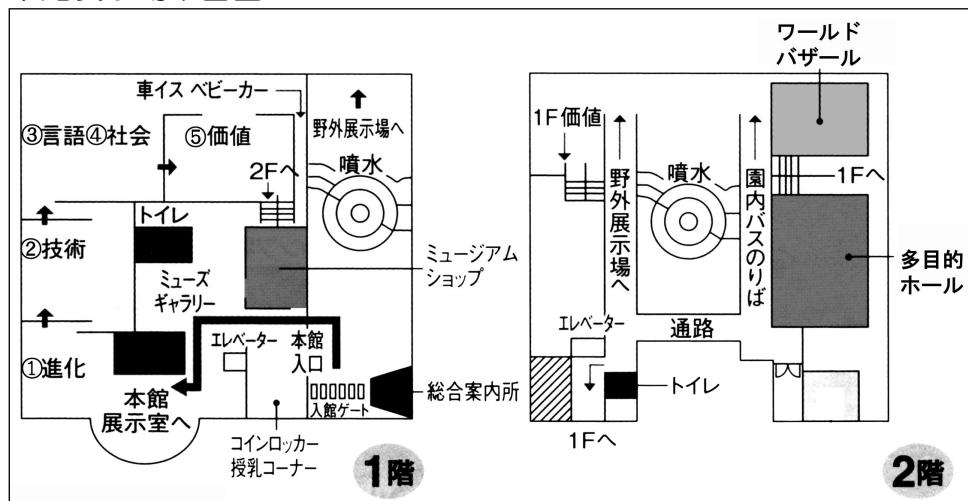


本館展示室

世界各地から収集した民族資料約 6000 点を、テーマごとに 5 つの部屋で展示しています。

地域や民族を超えて、同じ目的のために考え、作り、使う道具・モノを見くらべて、人間の 共通性・普遍性、あるいは、民族の独自性・多様性を探ってください。

本館展示場平面図



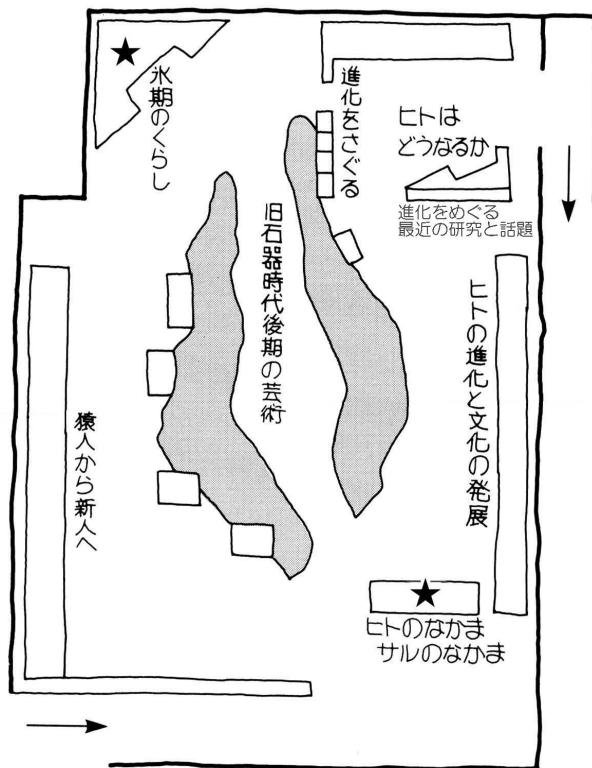
野外展示場

23 カ国 31 の家屋で、各地の特色ある文化を紹介しています。家をまるごと移築、復元、展示するのは、住まいにはそれぞれの民族の知恵や知識や技術が 集積 しているからです。展示する家や生活用具から、そこに住む人びとの暮らしぶりを想像して下さい。

なお、国際情勢の変化や 学術研究 の発展にともない、展示の一部に現状にそぐわない箇所が生じておりますが、 状況 や学説の安定をまって改訂する予定です。どうぞご了承 のほど、お願ひいたします。

ほんかんだい しつ 本館第1室：ヒトのはじまり——進化 しんか

ヒトが現在のような身体になり、現在のような文化を発展させるまでには600万年とも700万年ともいわれる長い年月がかかっています。この展示室では、人類のなりたちとその生物的、文化的 特徴、そして全世界への拡がりを 紹介 します。



EVOLUTIONS

Through biological specimens and prehistoric artifacts, this hall examines the process of human evolution and the diffusion of human beings to all over the world.

ヒトの器用な手

ヒトは直立二足歩行をすることにより、両手が自由になりました。それだけでなく、ヒトの手は脳の発達と互いに作用しあって、たいへん器用な指さばきができるようになりました。

ヒトの手は、親指が長く、他の4本の指と十分に対向しているの

で物を上手に「にぎる」、「つかむ」、「つまむ」ことができます。いっぽう、類人猿は親指がみじかいので、ひとさし指と中指とで、あるいは折り曲げたひとさし指と親指とで物をつかみます。



類人猿

ヒト

マンモスの骨で建てた家

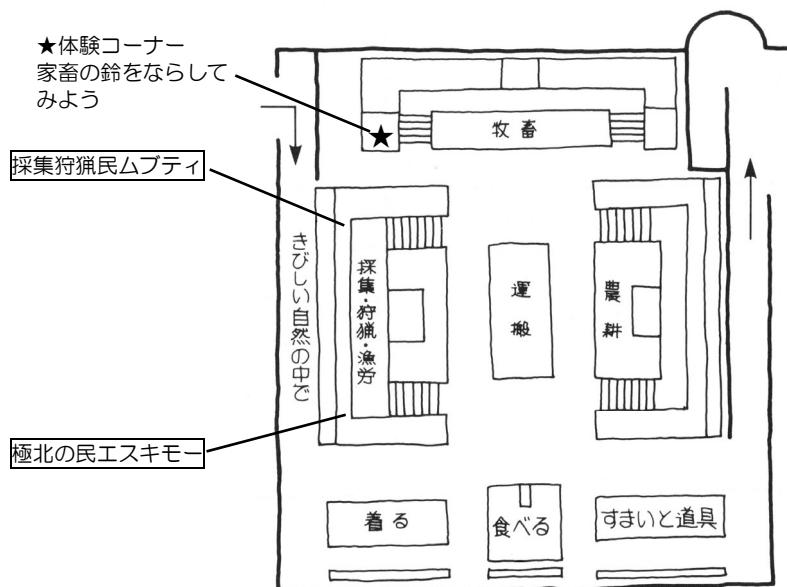


シベリアでは、マンモスの骨や牙で建てた数万年前の住居跡が発見されています。直径約5mのドーム型で、骨組みを丸太とマンモスの牙でつくり、その上に皮をかぶせた住居です。毛皮を押さえるためにはマンモスの牙や骨が利用され、ドームの接地部分のまわり

には、マンモスの頭部やアゴの骨がならべられていました。ジオラマでその様子を再現しています。

身の回りのものを活用し、機能的な住居や衣服を発明して寒さを克服した人々は、やがてアラスカへわたりアメリカ大陸を南下していきます。このようにヒトは、生物学的な変化ではなく、文化によって新しい環境に適応していった結果、世界中へ広がっていきました。

ほんかんだい しつ
本館第2室：生きるための工夫——技術
 きょう とも のう たよう
 器用な手と、それと共に発達した脳により、ヒトは多様な技術を
 編み出し、いろいろな道具を作ってきました。およそ1万年前まで、
 私たちの祖先は、野、山、川、海で生きる狩猟、採集、漁労の民
 でした。その後農耕や牧畜も生業としはじめましたが、多様な自然
 環境に適応して生活するために、食料の獲得とその調理、衣類、
 住まい、輸送などの技術を発展させてきたことは、人類共通に見ら
 れることです。この展示室では、人類のさまざまな技術を民族資料
 2000点余と映像プログラム40点余にて紹介しています。



TECHNOLOGY

Adapting to environments, human beings have developed various techniques: getting food, cooking, clothing, housing and transportation. This hall exhibits human achievements in technology.

◆ 映像プログラム一覧 ◆

カツコ内は撮影年です

きびしい自然の中で生きる	
砂漠のサン(ブッシュマン) : アフリカ南部、カラハリ砂漠	(1962)
極北のイヌイット(エスキモー)	(1976)
着るための工夫	
1 身体の装飾と刺青	ブラジル (1975) とインドネシア (1982)
2 ミン族のペニスケース	パプアニューギニア (1968)
3 木の皮でパンツを作る	コンゴ民主共和国、ムブティ (1972)
4 ハンモック	ブラジル、カマユラ (1975)
5 羊毛を手でつむぐ	デンマーク、フェロー諸島 (1979)
食べるための工夫	
1 クカクカの石蒸し料理	パプアニューギニア (1968)
2 サゴ澱粉精製	インドネシア、イリアンジャヤ、スマトラ (1982)
3 ユカの毒抜き	コロンビア、アマゾン河支流 (1972)
4 テフの草でパンを作る	エチオピア、アムハラ (1980)
5 塩づくり	インドネシア、イリアンジャヤ、ダニ (1968)
6 ソバのごはん	中国、雲南省、アシ (1981)
すまいと道具	
1 ミン族の石斧づくり	パプアニューギニア (1977)
2 かごつくり	ブラジル、ナンピクワラ (1978)
3 竹のびく作り	中国、雲南省、タイ (1981)
4 ナイル川の土器づくり	南スーダン、ヌエルとヌバ (1979)
5 樹上の家作り	フィリピン、パラワン (1974)
採集・狩猟・漁労: オセアニア	
1 海と川から食料をとる	オセアニア各地 (1969, 77, 82)
2 素もぐり・真珠母貝とり	ツアモツ諸島 (1969)
3 凧あげ漁	ソロモン、マライタ島 (1971)
4 ジュゴン漁と海亀漁	パプアニューギニア (1977)
5 サメの輪どり	サモア (1969)
採集・狩猟・漁労: アフリカ	
1 森の中で採集する	コンゴ民主共和国、ムブティ (1972)
2 網の追込み猟	コンゴ民主共和国、ムブティ (1972)
3 ナイル川のカバ狩り	南スーダン、ヌエル (1979)
4 イツリの森で象を狩る	コンゴ民主共和国、ムブティ (1972)
農耕: イモと畑作	
1 マンジョウカの収穫	ブラジル、カマユラ (1975)
2 マプリックのヤムイモまつり	パプアニューギニア (1977)
3 タロイモの料理	ソロモン、サンクリリストバル島 (1974)
4 ムスタンのソバづくり	ネパール、チベット (1977)
農耕: 焼畑と水稻耕作	
1 焼畑の陸稻栽培	タイ北部、アカ (1974)
2 ダニの焼畑	インドネシア、イリアンジャヤ (1970)
3 水田の稻作	中国、雲南省、白族 (1981)
4 水稻の収穫	インドネシア、バリ島 (1967)
牧畜: ヨーロッパ・アフリカ・アメリカ	
1 サーミ人のトナカイ放牧	ノルウェーとフィンランド (1980)
2 アルプスの冬の牛追い	スイス (1971)
3 ナイル川で牛の放牧	南スーダン、ヌエル (1979)
4 ラクダの血と乳を飲む	ケニア、トゥルカナ (1980)
5 ケチュアとコンドル	ペルー、アンデス山地 (1972)
牧畜: 西アジア・中央アジア・北アフリカ	
1 高原の遊牧民バクティアリ	イラン (1972)
2 ヤギや羊を放牧する	エジプト、ベトウェイン (1982)
3 チベットのヤク遊牧	中国、チベット自治区 (1982)
4 ヤギの放牧	中国、雲南省、アシ (1981)
5 トルクメン族のケチャー作り	イラン、ゴルガン高原 (1982)

※映像装置により自動再生しているものがあります。ご了承下さい。

きょくほく たみ
極北の民エスキモー

エスキモーは、**北極圏**に沿った7000キロ以上の広大な地域にちらばって暮らす複数の民族の総称です。

彼らは、グリーンランド(デンマーク領)、ロシア、アメリカ、カナダのそれぞれ一部、計4つの国にまたがって暮らしています。その中のカナダ・エスキモーの人びとを「イヌイット」と呼ぶこともあります。

エスキモーの伝統的な食生活は**狩猟**によって得た生肉が中心です。アザラシやセイウチ、クジラ、カリブー(トナカイ)などの大型**海獣**・動物、サケやマスなどの魚を捕獲していました。寒冷な気候のために植物採集によって栄養を得ることは困難ですが、その代わりに生肉を食べることで、ビタミンCやビタミンDといった栄養を摂りました。もし、エスキモーの人びとが肉を煮たり焼いたりして食べ続けたら…必要な栄養が摂れず、病気になってしまふかもしれません。

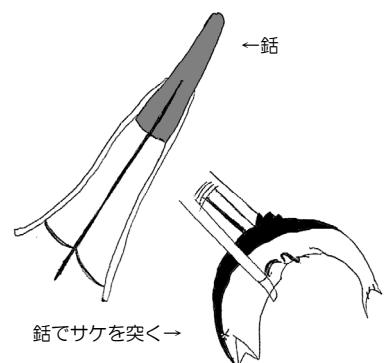


*エスキモーの居住地域

工夫された漁法

エスキモーの人びとは海の生き物を捕えるために様々な工夫をしてきました。例えば、大型のセイウチやクジラなどは、**銛**につなげたロープに抵抗となる**浮き袋**をつけることでスピードと体力を奪い、つかまえやすくなります。

サケやマスはおとりと銛を用いて捕られます。おとりはセイウチの牙や骨でてきており、小魚の形をしています。おとりを水中で泳がせることでサケをおびき寄せ、狙いを定めて銛でしとめます。サケを突く銛は、独特な三つ叉の形をしています。中央の鋭い針がサケの胴体を刺し、その左右につけられた針がサケの胴体をがっちりとつかまえて離さない仕組みです。



★ここで紹介した道具は、狩猟採集コーナーに展示しております。どんな道具か実際に見てみましょう。

さいしゅうしゆりょうみん
採集狩猟民ムブティ



ムブティは、アフリカ中央の森林地帯、コンゴ盆地北東部のイトゥリの森に約3~4万人住んでいます。

背が低く、男性は平均145cm前後、女性は135cm前後であるため、ピグミー(小さい人)とも呼ばれています。家族5~20からなる、バンドという居住集団をつくり、森の中で移動生活を送っています。

森林のみの民

ムブティは、野生のイモ類、キノコ、木の実などを採集し、弓矢や網を用いてダイカー、サルなどの小型動物を狩猟します。網を用いた狩猟をネット・ハンティングといい、蔓の内皮を編んで作った高さ1~1.5m、長さ40~100mのネットをつなぎ合わせて円形に張りめぐらし、動物を追いたててネットに絡ませてつかまえます。ゾウなどの大型獣を槍でしとめることもあります。蜂蜜も重要な食糧で、ハニー・シーズン(蜂蜜の季節)と呼ばれる4~6月には、食物の70%が蜂蜜でまかなわれます。

森の外との関係

イトゥリの森の近くにはムブティだけでなく、農業を営む人びとも住んでいます。ムブティは彼らと共生的関係を形成し、8月から11月の雨季の間、ムブティは森を出て農耕民の畠仕事を手伝って生計をたてています。狩猟で得た肉や蜂蜜を農作物と交換したりもします。ムブティは、かつては独自の言語を持っていましたが、現在はその言語をなくしてしまい、近くに住む農耕民の言語を借用して使っています。またムブティは、歌やダンスが上手なことでも有名です。

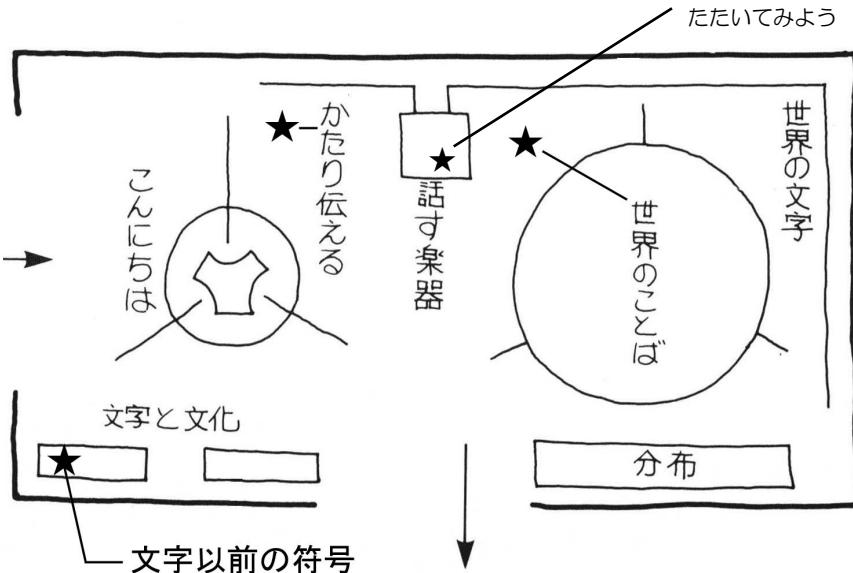
イトゥリを含めたアフリカの森林は、1990年代から外国企業による開発が進み面積が大きく減少しました。森の近くを伐採会社のトラックが走るようになり、モノや人がひんぱんに出入りするようになりました。過度な伐採の影響で環境破壊が進んだ土地もあります。森の民のくらしは、森の外—私たちを含めたグローバルな関係の中で変わりつつあります。

ほんかんだい しつ 本館第3室：ことばの世界——言語 げんご

“ことば”はヒトを他の生き物から区別する特徴のひとつです。人類は、数万年前から言語を使用していたと考えられています。お互いの意志を伝え合うために、音や声を発し、記号を用い、そしておよそ5,000年よりも前に文字を発明しました。言葉の使用は、抽象的思考を可能にし、また知識を次の世代に伝達し集積させていくのに重要でした。

この展示室では、言語の役割とその多様性を、民族資料とともに音声や映像で紹介しています。

★体験コーナー
ファン人の太鼓をたたいてみよう



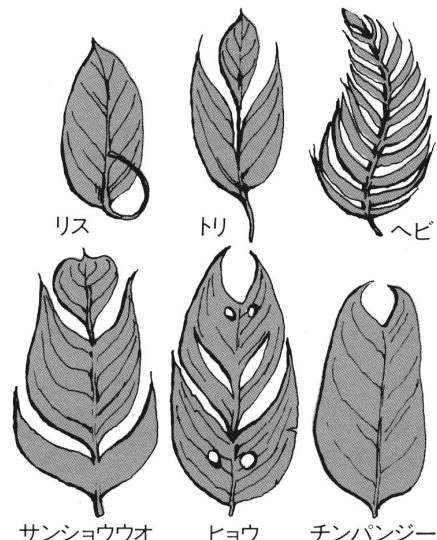
LANGUAGE

To communicate with each other, human beings use languages consisting of sounds, writings and symbols. This hall explains the role and diversity of languages.

ふごう 文字以前の符号—エコンビ

コンゴ民主共和国（旧ザイール）
のイトウリの森で採集 狩猟 生活を
する民族ムブティが、カサブルとい
う植物の大きな葉でつくるエコンビ
と呼ばれる目印は、動物の種類や
自分の属する集団をあらわします。

えもの
獲物を追うとき、根元を進行方向
に向けて置いてゆくことによって、
道に迷わず、仲間に行き先を伝える
ことができます。



たいこ 話す楽器：太鼓ことば

西アフリカから中部アフリカにかけての地域では、人間が話す言葉の
特徴をなぞって、太鼓の音の高低、強弱、長短によりメッセージを伝える
習慣があります。写真はカメルーンのファンの太鼓です。

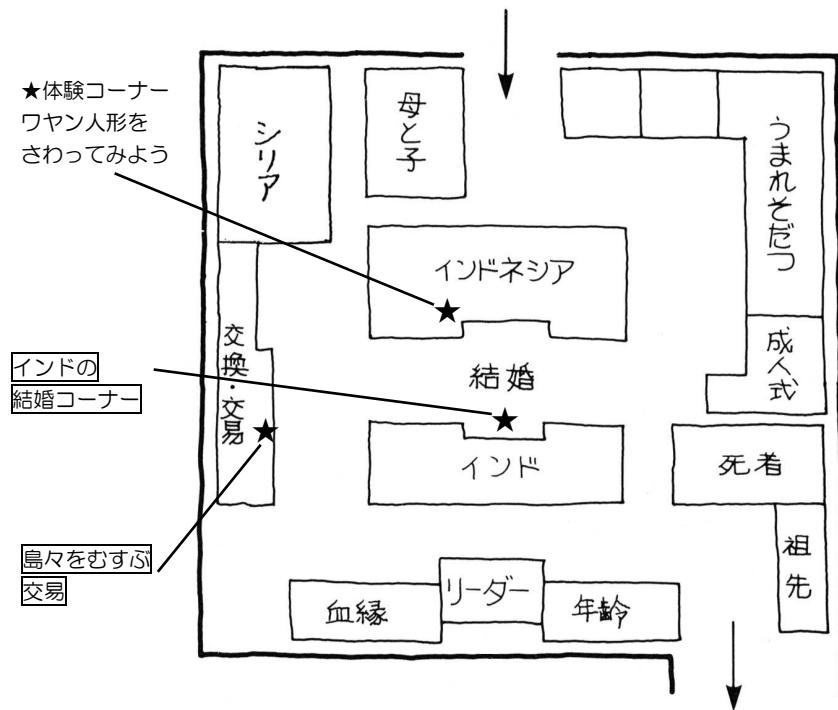
マホガニー製のこの太鼓の音は数 km 先まで届き、森に働きに出かけている仲間を呼び戻したり、他の村へ何かを伝えたいときに用います。

熱帯雨林の森では狼煙をあげても煙は葉に遮られてしまいます。一方、太鼓の音は人間の声よりも遠くまで響くため、電話や無線のない時代、とても優れた通信手段でした。現在でも祭りや儀礼の場を中心に使用されています。



ほんかんたい しつ
本館第4室：人のつながり——社会 しゃかい

ヒトは、家族をはじめ、いろいろな社会関係の網の中で生きています。ヒトの一生をたどりながら、さまざまな社会のしくみを説明し、社会を作つて生きる人類という側面を、1000余の世界各地の民族資料と40数プログラムの映像から紹介します。



SOCIETY

From birth to death, man's life is a serial reproduction of human relations. This hall presents various kinds of social systems such as family, kinship, trade and community.

◆ 映像プログラム一覧

カツコ内は撮影年です

- うまれ育つ：出産から少年まで
- 1 クカクカの山の出産
 - 2 頭と顔の整形
 - 3 子供の命名式
 - 4 森の狩人としつけ
 - 5 チベットの出家
 - 6 正月とこども

- うまれ育つ：成人式
- 1 カツオ漁成人式
 - 2 ワニの成人式
 - 3 ムブティの成人式
 - 4 割礼と抜歯
 - 5 ミツオゴの成人式
 - 6 囲いの中で美女にする

- 家庭をつくる：交際と求婚
- 1 メンディの男女交際
 - 2 求愛の笛吹き
 - 3 求愛のダンス
 - 4 雲南の歌垣アシ跳月
 - 5 チロルの冬追いまつり

- 家庭をつくる：結婚式
- 1 貝貨で嫁もらい
 - 2 アムハラの幼児婚
 - 3 ムブティの結婚式
 - 4 ロマ（ジブシー）の結婚式
 - 5 クレタ島の結婚式
 - 6 バラの谷の結婚式

- 社会のしくみ：戦争と平和
- 1 ゴゴダラのカヌーレース
 - 2 養子縁組
 - 3 藩王の裁き
 - 4 ヨボのまつり
 - 5 部族対抗大相撲

- 社会のしくみ：呪術師とシャーマン
- 1 呪術で病気をなおす
 - 2 魔の呪術ブードゥ
 - 3 殺人の呪術
 - 4 収穫感謝祭
 - 5 災厄ばらいの家祭
 - 6 死者がのり移る巫女

- 葬礼
- 1 クカクカのミイラ作り
 - 2 ムスタンの鳥葬
 - 3 鳥の羽根で死者を飾る
 - 4 石積みの墓場
 - 5 ラマ教の火葬

- 祖先とのつながり
- 1 祖先供養マネネ
 - 2 二次葬クワンカイ
 - 3 祖先の頭蓋骨と踊る
 - 4 ドゥクドゥク
 - 5 ビスのまつり

- パプアニューギニア（1968）
ベネズエラ、ヤノマモ（1974）
インドネシア（1970）とエチオピア（1980）
コンゴ民主共和国、ムブティ（1972）
ネパール、ムスタン（1977）
中国、雲南省、タイ（1981）とアシ（1981）

- ソロモン諸島（1975）
パプアニューギニア、セピック川流域（1975）
コンゴ民主共和国、イトゥリの森（1982）
エチオピア（1972）と南スダーン（1979）
ガボン（1973）
ブラジル、カマユラ（1981）

- パプアニューギニア（1981）
バングラデシュ、ムル（1973）
パプアニューギニア、トロブリアンド諸島（1976）
中国、雲南省、アシ（1981）
オーストリア（1971）

- ソロモン諸島、マライタ島（1973）
エチオピア（1980）
コンゴ民主共和国、イトゥリの森（1982）
マケドニア（旧ユーゴスラビア）（1975）
ギリシャ（1972）
ブルガリア（1976）

- パプアニューギニア（1977）
インドネシア、イリアンジャヤ、アスマット（1982）
イエメン（1977）
ベネズエラ、ヤノマモ（1975）
ブラジル、アマゾン河支流（1974）

- コロンビア、アマゾン河支流（1972）
ハイチ（1982）
パプアニューギニア、イエローリバー（1977）
インドネシア、ダヤック（1972）
韓国、京畿道（1972）
インドネシア、バリ島（1973）

- パプアニューギニア（1968）
ネパール、チベット（1977）
ブラジル、チュカハマイ（1981）
マダガスカル、マハファリ（1975）
インド、ラダク地方（1982）

- インドネシア、スラウェシ、トラジャ（1972）
インドネシア、ダヤック（1972）
パプアニューギニア（1977）
パプアニューギニア、トーライ（1975）
インドネシア、イリアンジャヤ、アスマット（1982）

インドの結婚コーナー：カースト

カーストとは、結婚や食事に関する「タブー（禁忌）」など、厳格な規制をもつ、インドの階層制の通称です。カーストによる差別は法律で禁止されていますが、とくに地方では今でも社会に根づいています。

ヴァルナ カーストというと、インド古来のバラモン（司祭）、クシヤトリヤ（王侯・武士）、ヴァイシャ（庶民）、シュードラ（隸屬民）の四姓と理解されることが多いですが、これは正確には「ヴァルナ（色）」と呼ばれます。古代にヨーロッパ系のアーリヤ人がインドに侵入して、支配者となりました。肌の白いアーリヤ人と肌の色が濃い先住民とを区別するヴァルナ（色）という語が使われ、「身分」「階層」の意味が加わりました。混血が進み肌の色では区別できなくなったとともに、この語は依然として「階層」の意味に使われ続けたのです。

ジャーティ カーストとは、ポルトガル語で「家柄」「血族」を意味するカスタに由来する語です。インドでは、カースト集団を「生まれ」を意味する「ジャーティ」という語で呼んでいます。ひとつの村は、ブラーマン（ヒンドゥー教司祭）、地主、農民、金銀細工師、銅細工師、鍛冶屋、土器職人、織物職人などの職能集団、すなわち数十の「ジャーティ」で構成され、それらは、淨と不淨（ケガレ）の観念に基づいて、上下の序列がつけられています。

タブー そのために、カーストの上位の者が下位の者と食事を共にすることは、ケガレが移ると考えられ、タブーとされています。また、カーストが異なる者同士の結婚もタブーとされ、「カースト内婚」（同じジャーティ内で結婚する）が行われます。ただし、婚姻が許される同程度のジャーティもあり、その場合、女性はより上位の男性に嫁ぐのがよいとされ、それを「ハイパーガミー（上昇婚）」と言います。その場合はとくに、たくさんの「ダウリー（持参財）」を嫁側が用意し、婿側の家族に贈与することが求められます。

モノのやりとり ～島々をむすぶ交易

贈り物がつなぐ関係 人とお付き合いにとって、「贈り物」は重要な意味を持ちます。たとえば、誕生日や記念日にはプレゼントを贈るなど、私たちが誰かと親しい関係を続けたいと願うとき、想いや願いをこめて物や言葉を贈り合います。ポイントは、貰^{もら}いっぱなしではなく「お返し」をすること。たとえ見返りを期待されていなくても、感謝の気持ちを表したり、別の機会に返礼^{へんれい}をすることで、人間関係^{えんかつ}が円滑^{えんかつ}に進むというわけです。こうした「贈り贈られる」ことを「互酬性^{ごしゅうせい}」といいます。個人的な関係だけでなく、会社・団体、集落や共同体といった集団同士においても、繋^{つな}がりを深め強めるためのやり取りがされています。集団間になると、贈り物の行為はより形式的、儀礼的^{ぎれい}になる傾向^{けいこう}があります。

島々をむすぶ交易 ニューギニアの島々では、島でとれる特産品を物々^{ぶつぶつ}交換して生活に必要なものを手に入れます（交易）。島ごとに手に入る品^{ことう}が異なるため、近隣^{きんりん}だけでなく広く遠洋^{えんよう}に繰り出し離れた島々とも交易を行います。交換される物品は、魚、タロイモ、ココナツなどの食料品、土器、樹皮布^{じゅひふ}や網袋^{あみのくろ}などの生活必需品、装飾品^{ひつじゅひん}、動物の牙^{くは}、貝、鳥の羽にいたるまでさまざまです。交易品は、数々の島を経由しながらさらに遠く離れた島へと運ばれていきます。カヌーでの危険な航海を経てやって来た人々は大いに歓迎^{かんげい}され、宴会^{えんかい}に招かれ、もてなされます。

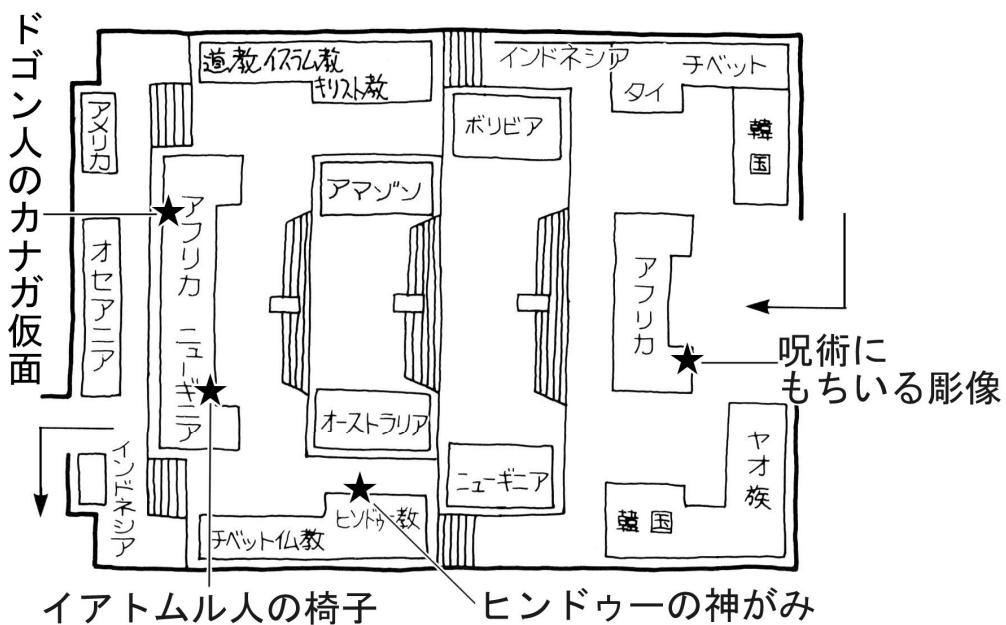
交易へは訪問先の儀礼や祭りに招かれたとき、新造カヌーのお披露目^{しんぞう}などの際に出かけます。交易は大体の品目の目安^{めやす}が決まっていますが、贈り物の形をとるので、親しい仲だとあげすぎたりもします。交換の成果^{せいかく}は儀礼や祭宴^{さいえん}の場で評価^{けいひ}されますが、質や量もさることながら、誰から誰に贈られたかという系譜も重要です。

島で生きる人々にとって、他の島との関係を良好^{りょうこう}に保つことはくらしと直結^{ちょつけつ}する問題です。そのため交易は、単なる経済活動だけではなく、友好関係を深め人々の結びつきを強める役割^{ひくめ}を持っているのです。

ほんかんだい しつ 本館第5室：こころの宇宙——価値

せかいがん
ヒトは世界観をもち、そこに自分を位置づけることにより、ただ生きるのではなく、生きる意味や価値を見いだしました。これこそ他の生き物とは異なる、私たち人間の最大の特徴といえるでしょう。

この展示室では、人間が心の中に創り出したイメージの表れとして、世界各地の 宗教 や儀礼や 芸術 を紹介しています。



VALUES

People have their own world view and add the color to the life. This hall presents religion, rituals and arts, as representation of the meaning of life.

じゅじゅつ ちょうぞう
呪術にもちいる彫像

これは、コンゴ民主共和国（旧ザイール）
に住むコンゴ人たちの呪術医の彫像である。

体中に鉄片が埋め込まれているようすを見て、
ワラ人形に五寸釘を打ちつける日本の呪術を
思い出す方が多いと思う。ところがこれは、
他人を突然の不幸におとしいれるために使用
する人形ではない。かえって、他人からの邪惡
な呪術から護ってくれる呪術医を表わしており、
防御のために使用するものなのである。

彫像の腹の部分には二つの突起がある。
ここには、呪術から守ってくれる呪薬が
納められているのである。この突起には、
鏡の破片をつけたふたがされる。鏡は、悪靈
の目をくらませる、あるいは見えなくする
働きがあるとされている。また、彫像の手には、
小さな槍や刀が持たされていて、これで悪靈と闘うとされている。
口は開かれ、体内にとりついた悪靈を吐き出しているようすを示す。
呪薬は腹だけでなく、頭に納められていることもある。

一般にアフリカの彫像では、男女の違いが明確に外見で分かるように彫ってあるが、この彫像では、男女の差はさっぱり分からない。ただ、呪術医、あるいは、悪靈から身を護るために彫像としての特徴があるのである。同様な特徴をもった彫像は、人物像だけでなく、動物の像としても作られることがある。



ほんかんだい しつ
 本館第5室：こころの宇宙——価値

えんぜつしや いす
 イアトムル人の演説者の椅子

パプアニューギニアのセピック川中流域に住むイアトムルの人々は、迫力に満ちた神像や仮面の作り手として知られています。彼らの村の中央には精霊小屋が建ち、その内部には精霊や祖霊をかたどった彫刻や仮面などが置かれています。精霊小屋はイアトムルの人々を守護する精霊や祖霊が集う場所であるとされ、さまざまな儀礼が執り行われる神聖な場所です。



この「演説者の椅子」(イアトムル語で“テケ”)と呼ばれる椅子も精霊小屋の中に置かれます。椅子の側面には大きな顔をもつ立像がとりつけられていますが、これはイアトムルの人々が生きる大地を生み出した創造主ワグンをかたどったものとされています。この椅子と立像は別々に作ってつけられたものではなく、はじめから一本の太い丸太をくりぬいて作られています。

座ることのない椅子

この椅子は「けっして座ることのない」椅子です。精霊小屋に集う男たちは、腰かけたり寝そべったりするための台を使います。ふだん男たちは「演説者の椅子」に腰かけることはもちろん、触ったりすることも厳しく禁じられています。村の中での政治的な取り決めやもめごとの解決など、イアトムル社会にとって何か大切な問題が起きると、男たちは精霊小屋に集まって議論をします。演説をする男は、ある特別な葉(ユリ科植物)の束を手に持ってこれをときおり椅子にたたきつけながら、大きな声で自分の意見をまくしたてます。男たちは椅子に葉をたたきつけることによって、偉大なる創造主の力を自らのうちに呼び込み、その力を言葉に込めて発しているのです。

ほんかんだい しつ うちゅう かち
本館第5室：こころの宇宙——価値

かめん
ドゴン人のカナガ仮面

これは、ドゴン人のカナガと呼ばれる仮面です。仮面の顔部分の上に、“ヰ”形の飾りが乗るという独特の形をしています。飾りの中央の支柱は世界の軸を、上の腕木は天を、下の腕木は大地を表すとされます。

ドゴン人は、西アフリカ、マリ共和国の中央部に住む農耕民です。ドゴンの神話は天地創造の神話をはじめとして、壮大な宇宙観、世界観を持っています。ドゴン人は、特徴ある图形を規則的に用いた仮面を作る人々として有名です。仮面の踊りは、彼らの神話の世界を鮮やかに表現します。



死の世界と仮面

ドゴンの神話では、人間の過ちによって世界に死が出現し、その混乱を鎮めるために死者をかたどった仮面が作られるようになったと語られます。その後、狩人が獣を殺すたびに、あるいは何か重大な事件が起きるたびに仮面が作られるようになりました。仮面のモチーフはシカ、サル、ウサギといった野生動物から人間、そして首長の家までさまざまです。仮面は死と、死に関わる儀礼に結びついています。死者をほうむる儀礼に仮面が登場し、仮面の力によって死者は生者の世界と切り離されます。

死者を精霊の世界へ送り出す喪明けの儀礼では、仮面をかぶった男たちが太鼓の伴奏に合わせて踊ります。仮面にはそれぞれ決まった踊りがあり、神話に沿ったストーリーが演じられます。カナガ仮面は儀礼の最後に登場します。踊り手は仮面の飾りの先を大地に打ち当て激しく踊ります。この動きは鳥を表すとも、創造神が世界を創造する様子を表すとも言われます。

ほんかんだい しつ
 本館第5室：こころの宇宙——価値

ヒンドゥーの神がみ：シヴァ

ヒンドゥー教には、実に多彩な神様がいます。その中でも、現在、ヒンドゥー教を信仰する人びとの間で特に人気の高い神のひとりが、「シヴァ」です。シヴァは、宇宙の破壊をつかさどる神で、ブラフマー（宇宙の創造をつかさどる）、ヴィシュヌ（宇宙の維持をつかさどる）とともに、ヒンドゥー教の三大神と呼ばれています。シヴァは、両目の間に第三の目を持っており、彼が怒るときには激しい炎が出て、すべてを焼き尽くすとされています。

シヴァはまた、108種の舞踊を演じる「舞踊の神」ともいわれ、宇宙にあまねく満ちている力を示すナタラージャ（舞踏の王）の姿として表現されています。神話によると、シヴァと論争した異教徒が怒って、虎、蛇、小人（無知、暗黒の象徴。アパスマーラ）を作り、つづきと攻撃してきました。しかし、シヴァは笑いながら虎の皮をはいで身につけ、蛇を首に巻き、小人を踏みつけて踊り続けたといいます。この神話をもとにナタラージャの像が作られています。

シヴァは破壊の神とされていますが、破壊した世界を再建する創造力も持つ神です。宇宙は破壊されることによって、創造、維持というサイクルを繰り返します。ナタラージャの像は、シヴァのこうした宇宙的な活力を表現したものなのです。



ほんかんだい しつ
本館第5室：こころの宇宙——価値

うちゅう かち
きさき

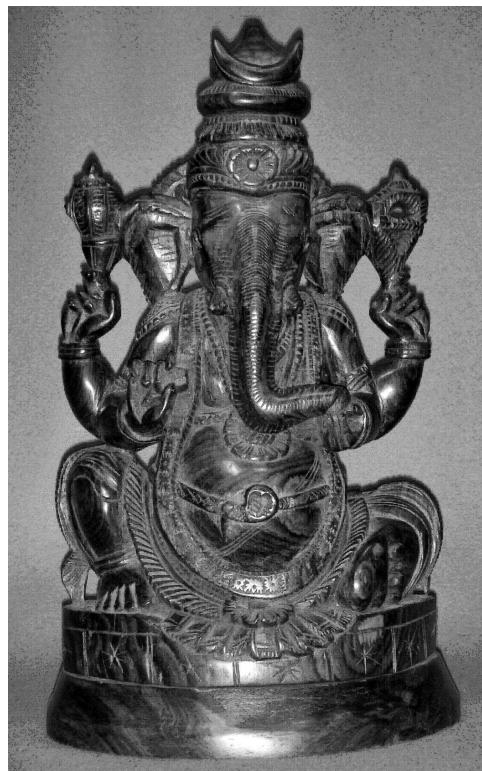
ヒンドゥーの神がみ：ガネーシャ

ゾウの頭を持つガネーシャは、シヴァとその妃あかであるパールヴァティの息子です。どうしてガネーシャはゾウの頭をしているのでしょうか？その理由は次の通りです。

パールヴァティは、夫の留守中に自分の体の垢を集めて人形を作り、それに生命を吹き込みました。こうして生まれた息子に彼女は満足し、用事をいいつけました。それは彼女の入浴中、家に誰も入れないように見張りをすることでした。そこへシヴァが帰ってきましたが、ガネーシャは父と知らず、母の言いつけどおりにシヴァを中に入れようとしたしませんでした。シヴァは怒ってガネーシャの首をはねてしまいます。

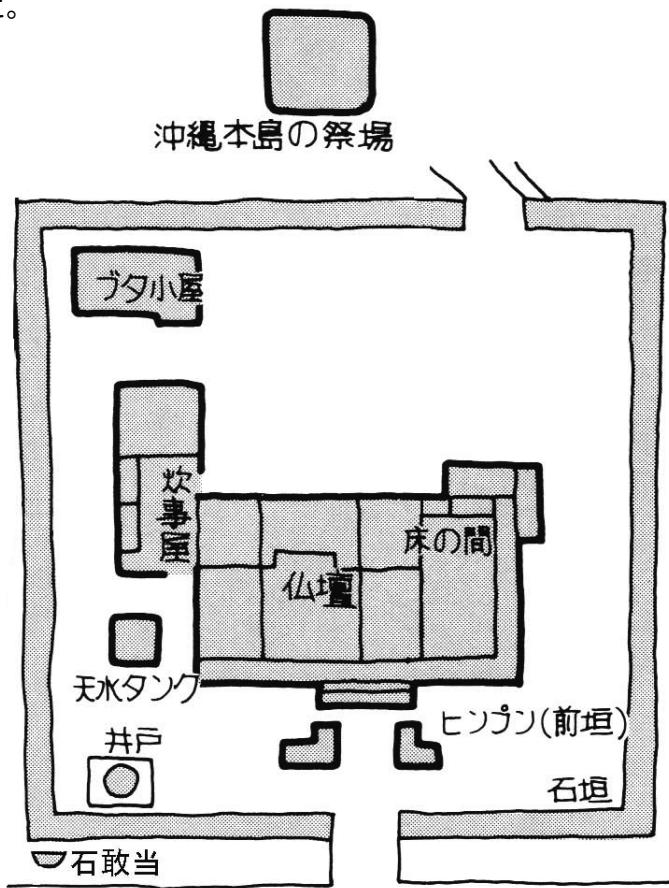
パールヴァティは息子の死を嘆き悲しました。シヴァは哀れんで、この息子を生き返らせるにし、部下に命じてガネーシャの頭を投げ捨てた方向に探しに行かせました。しかし見つけることができず、最初に出会った動物、つまりゾウの頭を持って帰ってきたので、それをガネーシャの頭として取り付け、復活させたのです。

現在ガネーシャは、障害しようがいを取り除き、成功と幸運をもたらしてくれる現世利益の神として、また、富と繁栄はんえいの神として信仰を集めています。



おきなわけん いしがきじま
沖縄県 石垣島の家

おきなわほんとう なんせいしょとう あねったい
 沖縄本島よりもさらに南にある南西諸島は、亜熱帯の島じまから
 なります。そのひとつである石垣島に、今から 140 年ほど前の
 1871 年ごろ、琉球国時代の士族の住まいとして建てられた家を
 移築しました。



沖縄県 沖縄本島の祭場

さいじょう
 アサギと呼ばれる そんらくきょうどう の祭場。毎年 きゅううれき ほうさく はんえい
 村落共同 の祭場。毎年 旧暦 の 7月には 豊作や繁栄
 をもたらすニレー神を迎える かいじんさい もよお 海人祭が、女性たちだけで 催されます。

きこう 気候と住まい：台風とともに暮らす

毎年 7 月から 10 月までに何度も台風におそわれる石垣島の家には、いくつかの工夫がこらされています。その暴風対策の工夫を紹介します。

- ① 豊富に採れるサンゴ石で石垣を高く積みあげる。
風が直接、家に吹きつけないようにという工夫です。



- ② 庭に防風林を植える。
同じく、家に吹きつける風を少しでも弱めるための工夫です。

- ③ 屋根瓦をしっくいで固める。

屋根が風で吹き飛ばされないように“重し”的役目をもつ屋根瓦、この石垣島の家では平瓦(1枚 1.3kg)と丸瓦(1枚 1.9kg)を組み合わせ、およそ1万7千枚、25tもの瓦を使っています。さらに、瓦をしっくいで塗り固めて、おさえています。

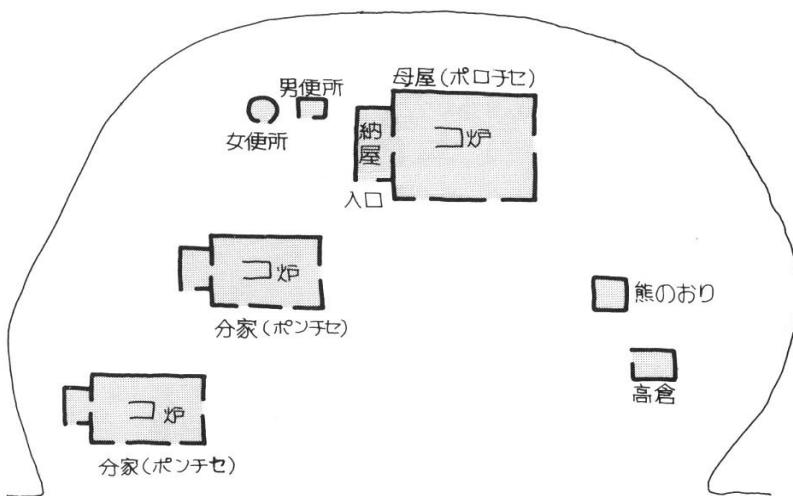
- ④ 母屋の柱をふやし、軒を低くする。

「石垣島の家」と「山形 月山山麓の家」とはおおよそ同じ面積ですが、石垣島の家の柱は102本、山形の家柱は74本とかなり違います。柱の数が多いのは、重い屋根をしっかりと支えるためです。軒下の高さは石垣島の家が270cmで、山形の家は430cmもあります。軒が低いことで、風は家の壁ではなく屋根の上を吹き飛んでいきます。

台風による被害を抑えるために、石垣島の人たちはいろいろな工夫をしてきましたが、まったく台風が来なくても、石垣島の人たちは困ってしまいます。この家の元の持ち主は、「井戸水は塩分があって飲めないからね」と言い、1953年に水道が引かれるまで、屋根にふった雨水を天水タンクにためて飲料水に用いていた苦労を語ってくれました。台風は大量の真水をもたらしてくれる天からの恵みでもあるのです。

ほっかいどう 北海道 アイヌの家

ほっかいどう せんじゅうみんぞく
北海道の先住民族であるアイヌが、19世紀末ごろまで暮らして
いたコタン（村）を、アイヌの人びとの協力で再現しています。敷地
の奥にあるのが両親、手前の2棟が分家した子どもたちの家です。
アイヌの人びとは炉を神様の寝床と考えたため、家は炉を中心に
造られています。



【建築材の特徴】

屋根や壁に使われているのはイネ科の植物（アイヌ名：ラベンペ）
で、1本1本がストローのような中空構造になっています。これら
を束ねると厚い空気の層ができ、断熱材と同じ役割をはたします。
アイヌは古くからこの資材の特性を活かし、自然の断熱材で家を
まるごと覆うことで、寒い時期でも比較的あたたかく暮らすことができたのです。

かんたいへいようこうえき
環太平洋交易

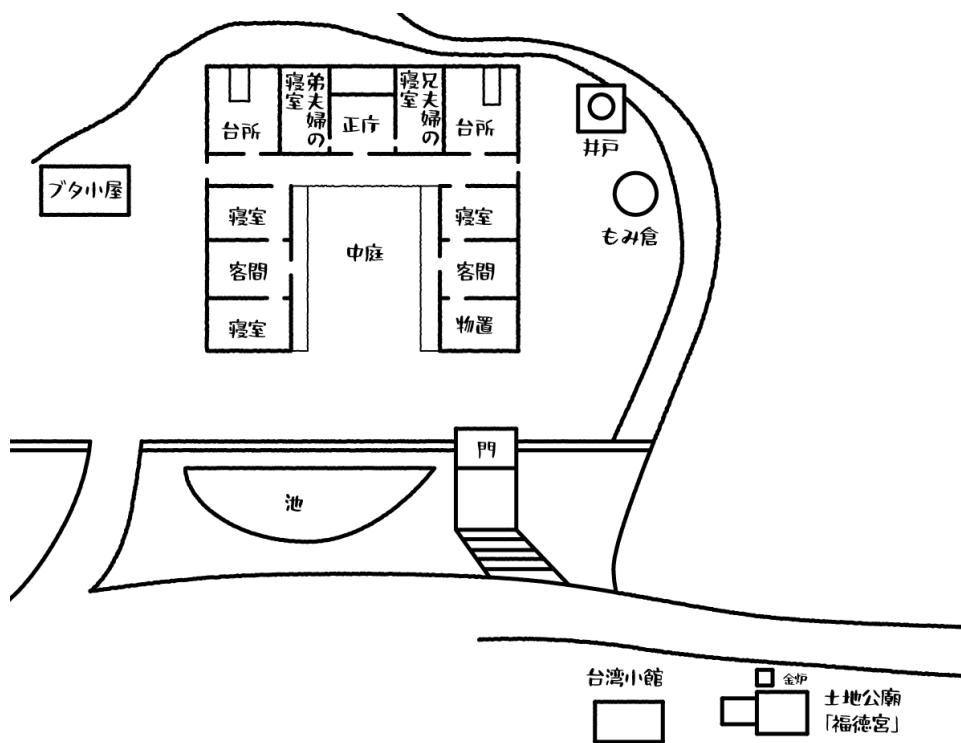
アイヌ民族は、東北地方の北部から北海道、樺太南部、千島列島にかけて古くから暮らしてきた先住民族です。かつてはアイヌモシリ（アイヌ民族の大地）の豊かな自然環境を基盤として、採集・狩猟・漁労を中心とした生活を営む一方、本州や大陸の諸民族とも活発な交易をしていました。アイヌによる交易は、大陸と日本をつなぐ架け橋の役目を果たしていたと言われます。

アイヌは製鉄の技術を持っていませんでした。そのため、南方では和人との交易で、生活必需品である鉄の小刀や鍋を手に入れました。米や酒、タバコなども好まれました。その代わりアイヌは和人に、テン、キツネ、アザラシなどの毛皮や、清（現在の中国）からもたらされた織物などを渡しました。これを和人は蝦夷錦と呼び珍重しました。北方では、山丹人と呼ばれた大陸のツングース系の人びとと交易し、アイヌは交易品として毛皮のほか、和人より入手した鉄製品の一部を渡していました。山丹人からの交易品には、矢羽に用いるワシの羽根や、薬とするセイウチの牙などがありました。蝦夷錦も山丹人との交易で得たものでした。

こうした交易は「環太平洋交易」と呼ばれています。江戸時代、徳川幕府が鎖国を始めてからもこの交易は引き続きおこなわれ、中国の織物は長崎からばかりでなく、アイヌを経由しても入ってきました。そのため、この「環太平洋交易」を、「北のシルクロード」と呼ぶ研究者もいます。

たいわん のうか
台灣 農家

この家は中国大陸南部 福建省から 移住してきた 漢族の伝統的な農家を 復元したものです。中国南部の 建築様式の流れをくみながら、台湾の 風土に合わせ、熱帯の強い 日差しをさけるため、また暴風雨の 侵入を 防ぐため、壁を厚くし 柱廊で家屋の前面をとりまき、屋根瓦を 漆喰で塗り 固めるなどの工夫があります。



【台湾の 土地公廟：福德宮】

「台湾 農家」の向かいにある建物は「福德宮」という名前の土地公廟です。福德正神土地公と呼ばれる神さまがまつられています。土地公は民間信仰における土地の 守護神です。

歴史と住まい：ふるさとのつながり

山がちな土地で 食糧 不足に苦しんでいた中国南部の人びとは、17世紀なかばから19世紀末にかけて、台湾に新しい農地を求めてたくさん移り住みました。この家は、そのような 福建系漢民族の伝統的な農家で、1917年に建てられた家をモデルとし、1950年代頃の生活を復元しています。

【三合院】

中庭を中心に三方に棟が並ぶ、このような建築形式を三合院と呼び、中国南部の流れをくむものです。中央の部屋 正厅では、祖先や 道教の神々をまつっています。正厅を背にして左手が 家長である兄夫婦の部屋、右手が弟夫婦の部屋で、左右から伸びる棟は、成長した子どもたちの部屋や農具置き場として使われます。こうした部屋 割りは、左を 優位とし、長幼の 序（年上と年下の 序列や 順序のこと）を重んじる考え方に基づくもので、屋根の高さにも反映されています。また、赤レンガを 積みあげた壁や、素焼きの 瓦を重ねた屋根なども伝統的な三合院の特徴です。



兄と弟、どちらの部屋の屋根が高いかな？正面からチェックしてみましょう。

【新天地で身を守る住まい】

台湾へ移住した人びとは、争いや 盗賊から身を守るために、家のまわりにトゲのある竹を植えました。また、窓を小さく、少なくし、さらにぶあつい木の 扉に 頑丈なかんぬき（扉が開かないようにする横木）をつけました。



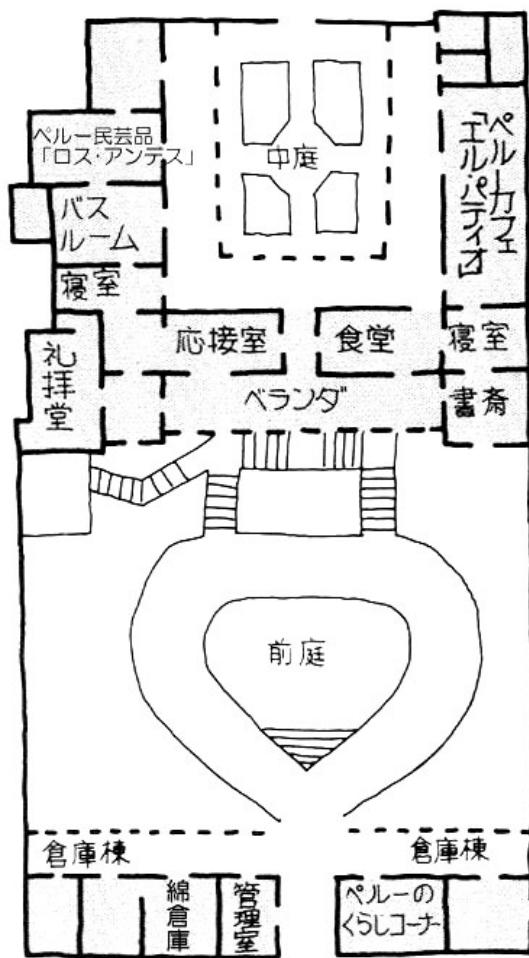
ほかにも、悪霊の侵入をふせぐための工夫もあります。探してみましょう。

【風水思想】

古来より中国には、風水という理想的な環境を 定める考え方があります。家屋は南向きに建て、背後に山林をひかえ、前面に池(水)を配すると良いといわれます。家族の健康や、家の 繁栄を願う人びとは、風水師に相談し、地形や 方位を 鑑定してもらいます。

だいのうえんりょうしゅ
ペルー大農園 領主 の家

この家は、アシエンダと呼ばれた大農園の領主の邸宅を復元したものです。ペルーの首都リマから約70キロほど離れた海岸地方のチャンカイ谷に建つ「カキ」という名前の大農園の館をモデルとしています。



【アシエンダ】

アシエンダとは、アメリカ大陸の旧スペイン植民地において、スペイン系領主が先住民のインディオやアフリカの黒人、アジア人らを小作人とし、その労働力を使って大規模な経営をおこなった農場のことです。16世紀末頃から発達したもので（ペルーでは1969年）、農地改革で解体されるまで（ペルーでは1969年）、牧場や商品作物の栽培により、莫大な収益を上げていました。

【建築様式】

中庭（パティオ）を囲んで回廊、そして居室が配置されています。この様式は、もとは8~15世紀にかけてイベリア半島を支配していたイスラーム世界によってたらされたものです。

せんじゅうみん いしょう でんとう がいらい
ペルー先住民の衣装：伝統と外来のミックス

ていこく インカ帝国は、1532 年にスペイン人によって 征服されました。その後、500 年近く たった現在でも、アンデス高地に住むケチュア 人は、腰織と呼ばれる古くから伝わる織り機を 使って、ポンチョ、肩掛け、帯などを作っています。伝統的な柄は、原色を巧みに組み合わせて 表現し、見た目にとても色鮮やかです。ケチュア人の衣装は、ヨーロッパから入ってきたズボンやスカートに、これら固有の要素を 組み合わせたスタイルが一般的。帽子は、山高帽や皿型帽が好まれます。



どうぶつ
アンデスの動物：アルパカとリヤマ



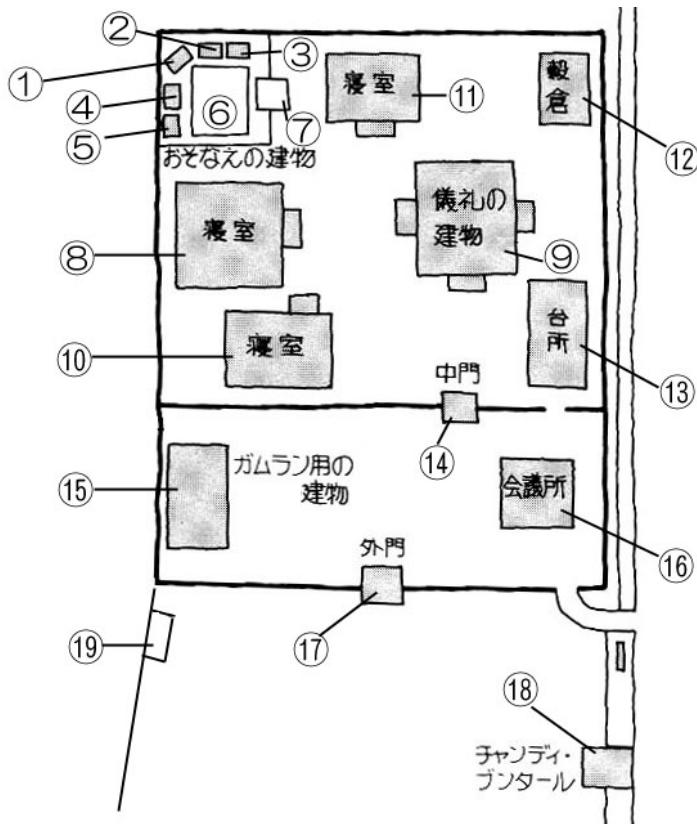
アンデス高地では、古くからラクダの仲間である「アルパカ」や「リヤマ」が飼育されています。どちらもおとなしい性格です。毛がモコモコしてふっくら見えるのがアルパカ（写真左）で、そのやわらかい上質な毛は、衣類を作るのに適しています。一方、リヤマ（写真右）はアルパカに比べてスマートな印象。毛はゴワゴワしており、衣類を作るのには適していません。しかし、アルパカに比べ、一回り大きく力も強いので、農作物などを運ぶ時には大活躍します。



とうきそく

インドネシア バリ島貴族の家

赤道直下の火山の島、バリ島。ヒンドゥー文化の影響を受けたこの地の社会には、貴族と平民をわけるカーストを模した制度があります。展示家屋は貴族階級の屋敷をモデルに復元したもので、敷地を内壁で3つにわけて建物を配置しています。いちばん奥の①～⑥はもっとも神聖な区画で、ヒンドゥーの神がみや祖先をまつる屋敷内の寺院（祭祀場）があります。⑧～⑯の中央部分は、儀礼の建物を中心に寝室、穀物庫、台所が建ち並ぶ生活の場であり、⑯～⑯の手前の部分は、お祭りや儀礼のときに余興として踊りやガムラン演奏をする場です。



いしょう インドネシア バリ島の衣装

バリの女性の普段着は、カインと呼ばれる無縫製の帯状の一枚布を体に巻くものでした。今ではイスラームやヨーロッパの影響もあり、ヒンドゥー教を信仰するバリ島でも女性は肌を隠すようになり、ブラウスやスカートといった装いをしていますが、お祭りや結婚式、舞踊ともなると華やかな衣装を身にまといます。

バリの舞踊には大別してワリ、ブバリ、バリバリアンという3種があり、舞踊によって衣装は異なります。ワリは、寺院内の儀式で神様のために踊る神聖なものです。ブバリも神聖な舞踊ですが、物語にそって舞います。バリバリアンは娛樂性が高く、神様と人間の両方が楽しむものであり、たくさん的人が観覧できるように、寺院の前の集会所などで踊ります。

マルハナバチの踊り（オレックタンブリリンガン）

バリバリアンには、レゴンやバリスといった有名な舞踊のほかに、オレックタンブリリンガンという舞踊があります。“オレック”は「柔らかく、しなやかな」、“タンブリリンガン”は「マルハナバチ」という意味です。この舞踊の女性役は、^{かんあり}冠とブンガ・マス(金の花)というかんざしで飾り立てた女王様のような衣装をまといます。

物語は、伝統的なバリの恋物語を表しています。
美しい花園で恋をした若い男女のハチが舞い踊る様子は、若いバリの人びとの求愛の儀式を象徴しています。今日バリでは盛んに新たな舞踊が作られており、これも 1950 年代に創作されたものと言われています。



ドイツ バイエルン州の村

ドイツ南部、バイエルン州のガルミッシュ・パルテンキルヘン周辺をモデルとして、のどかな美しい村の情景を復元しています。村は聖ヨセフの泉を中心に、色あざやかなフレスコ画の外壁をもつ2棟の民家と、丘の上の礼拝堂からなります。



ガルミッシュ・パルテンキルヘンは、バイエルン州の都ミュンヘンの南方90km、オーストリア国境近くにあるアルプス山麓の村です。小さい町ですが、冬のスポーツ、温泉療養、夏の避暑地として多くの観光客が訪れるリゾート地として有名です。このあたりの家並みの特徴は、街路にそってならぶ商店や民家の外壁に美しい壁絵が描かれていることです。この壁絵は250年の歴史を持ち、「風の絵」と呼ばれ、またその壁絵を描く画家は「風の画家」と呼ばれています。

風の絵とその技法

「風の絵」という名前のいわれは、そよ風のような手早さで描きあげなければならぬフレresco画特有の描き方に由来します。リトルワールドのresco画は、2つの技法で描かれています。ひとつは礼拝堂内部のプリマ・resco、もうひとつは2棟の民家の外壁に見られるゼッコ・rescoです。それぞれ次のような特徴があります。

<プリマ・resco (真正resco)>

壁の石灰モルタルが湿っている間に、顔料を水とともに浸透させる技法です。みずみずしい美しい色調ですが、一日に描く範囲が限られます。

<ゼッコ・resco (乾式resco)>

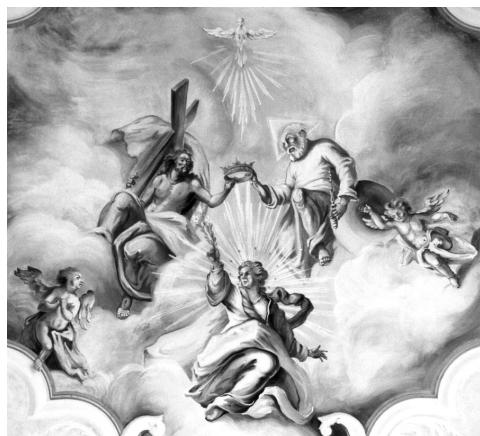
壁の石灰モルタルが乾燥した状態で、顔料を水ガラスで溶いて浸透させる技法です。風、雨、陽光による褪色に強く、外壁に適していますが、描写時と乾燥後の顔料の発色に差があります。



ゼッコ・resco画

「ガンブリーヌス」

ビールの国ドイツでは、ガンブリー
ヌスはゲルマン人にビール造りを
教えた神様（あるいは王様）。



プリマ・resco画

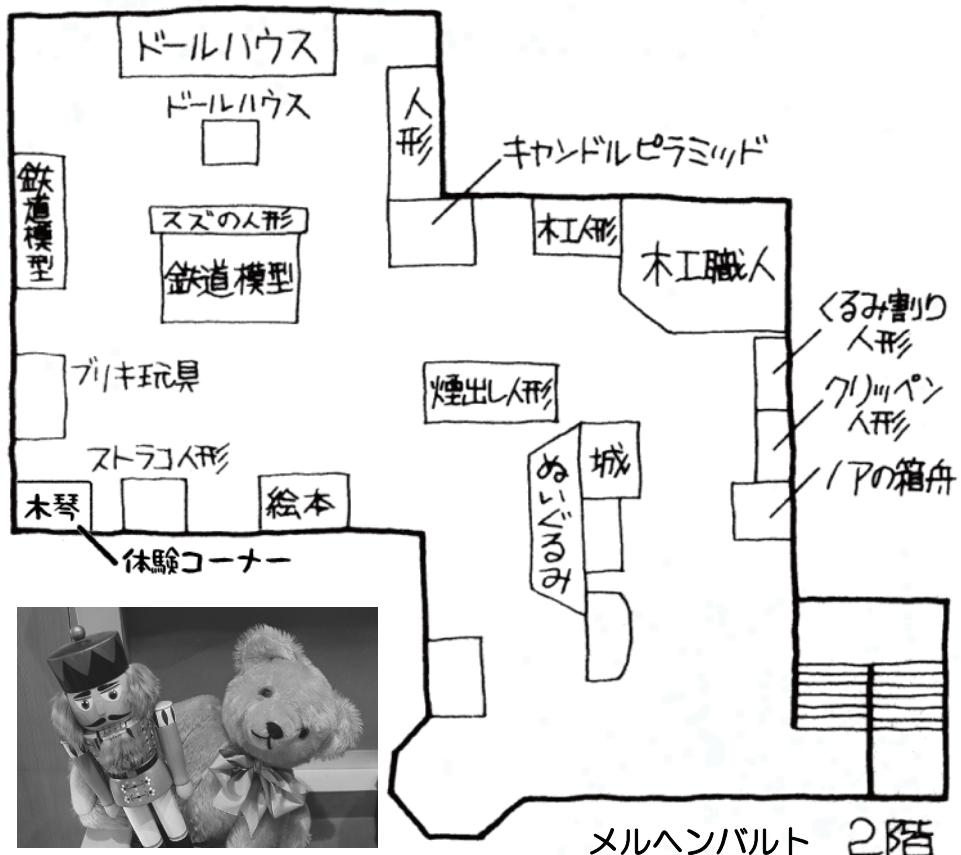
「聖母の戴冠」

父なる神、その子イエス・キリスト
とハトの姿の聖霊から黄金の冠
を授かり祝福を受けるマリア。

しゅう むら
ドイツ バイエルン 州 の 村

おもちゃ 王国 ドイツ

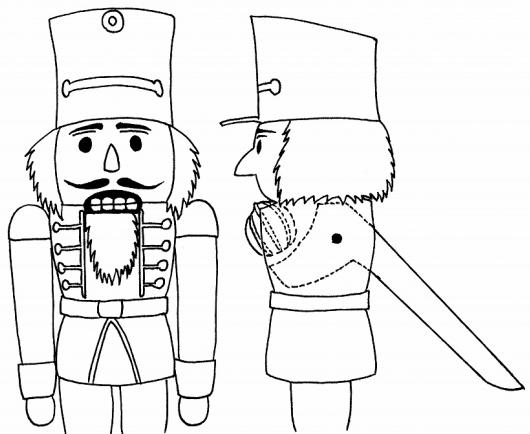
世界で初めて 産業としておもちゃ作りを始めたドイツ。今でも
おもちゃ王国として有名な国です。世界的に 人気のあるテディベ
アもドイツで誕生しました。メルヘンバルト2階 玩具展示室では、
木製やブリキ製のおもちゃ、ぬいぐるみなど、今なお世界中で 愛
され 続ける温かみあふれる手作りのおもちゃをご 覧いただけます。



くるみ割り人形

□にくるみを入れて、背中のレバーを下に動かすと、くるみがパカッと割れるしきみになっています。あごとレバーはつながっています。人形には大小さまざまなタイプがあり、実際にくるみを割ることができるのは、□にくるみが入る大きなものだけです。人形は王様や

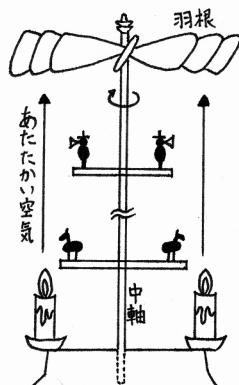
兵隊などの人物がモチーフになっていることが多く、日頃いばっている人に固いものを噛ませてやれという皮肉の意味が込められています。



キャンドルピラミッド

かわいくておしゃれなキャンドルピラミッド。□ウソクに火を灯すと、そこから昇る温められた空気により、上にあるプロペラのような羽根がゆっくりと回転しはじめます。

羽根の中軸に取り付けられた円板の上にいる人形たちもメリーゴーランドのようにくるくる回ります。



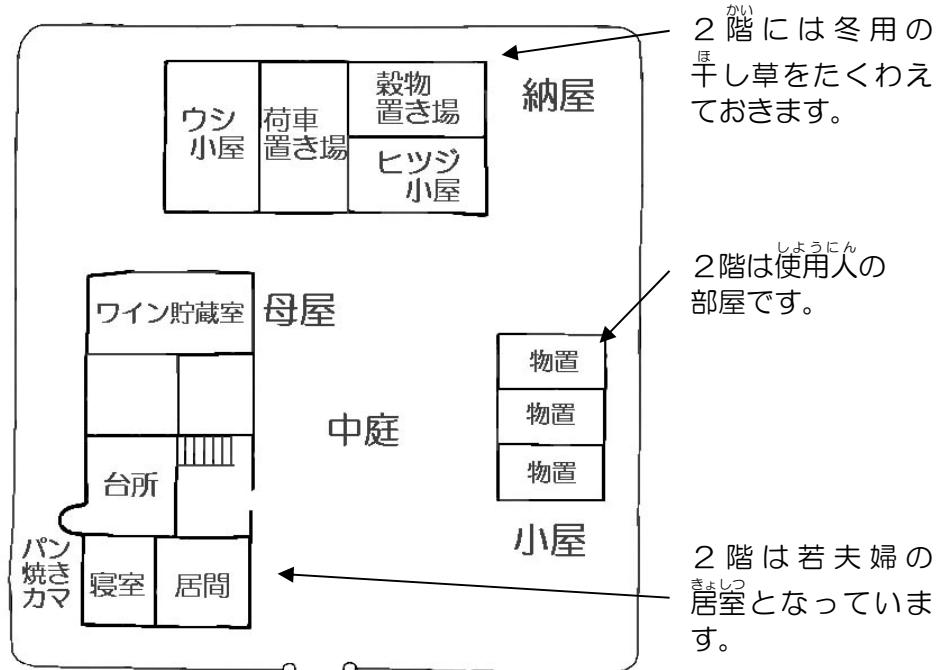
teddy bearの“teddy”とは？

ぬいぐるみの歴史の中で、変わらず広く親しまれているteddy bear。クマのぬいぐるみの代名詞ともなっている「teddy」は、アメリカ第26代大統領セオドア・ルーズベルトの愛称です。クマ狩りに出かけたルーズベルトが小グマを助けたというエピソードからヒントを得て、ドイツのマルガーレテ・シュタイフが1903年から製作をはじめ、一躍世界中にその名が広まり高い人気を得ました。

ちほう フランス アルザス地方の家

とうほくぶ フランス東北部、ドイツと国境を接するアルザス地方で、ウシやヒツジを飼うとともに、ムギ、ジャガイモ、トウモロコシ、ブドウなどを栽培している農家を復元しています。

かこ 庭を囲むように母屋、納屋、小屋を配置し、1850年代、アルザスの農村に伝統的な暮らしぶりが残っていた時代の様子を再現しています。

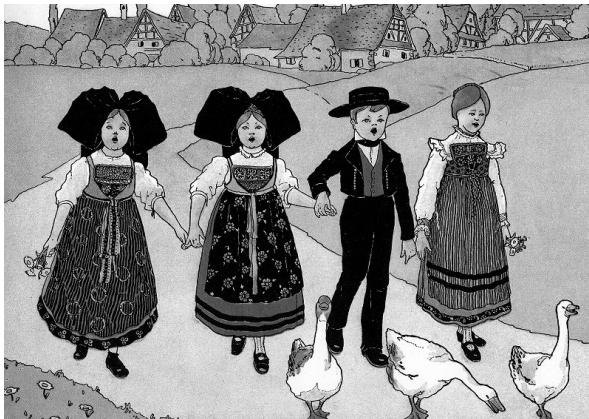


【内陸性の気候】

パリから東へ500kmにあるアルザス地方は、西にヴォージュ山脈があるため、大西洋の影響をあまり受けず、やや内陸性の気候となっているため、雨は年間800mmほどと比較的少なく（リトルワールドのおよそ半分）、夏暑く、冬寒い土地柄です。

アルザスの伝統衣装 でんとういしょう

アルザス地方の女性の伝統衣装は、ギャザースカート、黒い胸飾りがついたブラウス、頭には蝶結びのリボンをついたものが一般的です。リボンをつける習慣は、19世紀初めから広まったとされています。男性は、黒いズボンと上着、赤いベストを着て、帽子をかぶります。女性のリボンは信仰する宗教によって大きさが異なっており、大きいものはプロテスタント、小さいものはカトリック教徒であることを表しています。



出典：「Mon Village」, Hansi

コロンバージュ（木骨構造）の家 き ぼねこうぞう

おもや
母屋は、1582年に建てられたものです。リトルワールドへ持ってくるために解体した1985年まで、9代にわたって住まわれていました。かいたい
3階建て、白いしっくり壁に柱や筋かいなどが浮き出ている点が特徴です。
かべ すじ う とくちょう
このような建築様式は、中部ヨーロッパ独特のもので、コロンバージュ
けんちく ようしき どくとく
(木骨構造)と言われています。筋かいには、「ムギの穂」や「アンドレ
じゅうじか の十字架」のデザインが見られます。



さがしてみましょう

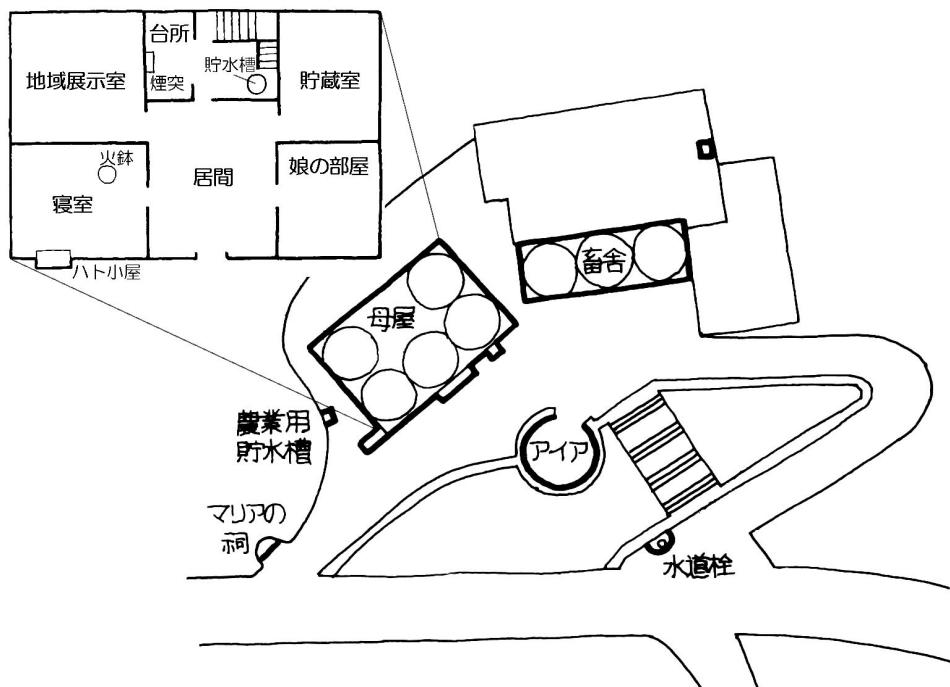
雨戸にあいたハート型の穴は、明かりとり。

また、邪視をふせぐ魔よけの意味ももっています。



イタリア アルベロベッコの家

イタリア半島南部、プーリア州アルベロベッコ 郊外こうがい の農家をモデルに母屋、畜舎などを復元し、地中海性気候の風土のもと、ウシを飼かいながらオリーブなどの果樹かじゅ を育てる農家の暮らしを再現さいげん しています。



【純粹な石造りの家】

アルベロベッコの伝統的な家屋は、とんがり 帽子の屋根を持つことが 特徴です。屋根は平たい石を 積み上げてつくり、このような屋根をいくつか持つ家屋をトゥルッリと 呼びます。トゥルッリは、床、壁、天井、屋根すべてを石で造ります。材料は、アルベロベッコ 近郊で採れる石灰岩です。

歴史と住まい：脱税が生んだ世界 遺産

【地名の由来】

“アルベロベッロ”という舌をかみそうな名前は、「美しい木」という意味です。現在はゆるやかな丘陵地帯にオリーブやブドウ、アーモンドなどの畠がひろがっていますが、かつては櫻の森であったため「美しい樹木のある森」と呼ばれていました。

【アルベロベッロ集落のはじまり】

そんな美しい森を開墾し畠をひろげ、今のアルベロベッロに集落ができたのは、500年ほど昔のことです。

【王さまと領主】

この頃、ここはある王さまの領土で、王さまに任命された領主が支配しており、王さまは、新しい住民や新築の家を報告して税金を納めろと領主に命令していました。家の軒数で税金の金額を決めていたのです。

【脱税】

悪いことを考える人は古今東西どこにでもいるようで、このアルベロベッロの領主は、王さまの命令に背き税金を逃れる方策を思いつきました。

“家の数で税金が決まるのなら、家の数を減らせばいい、家を一つでも壊せるように造ればいい。”何とも乱暴な思いつきで、農民たちはトゥルッリを造られ、住まわされたのです。

【世界遺産】

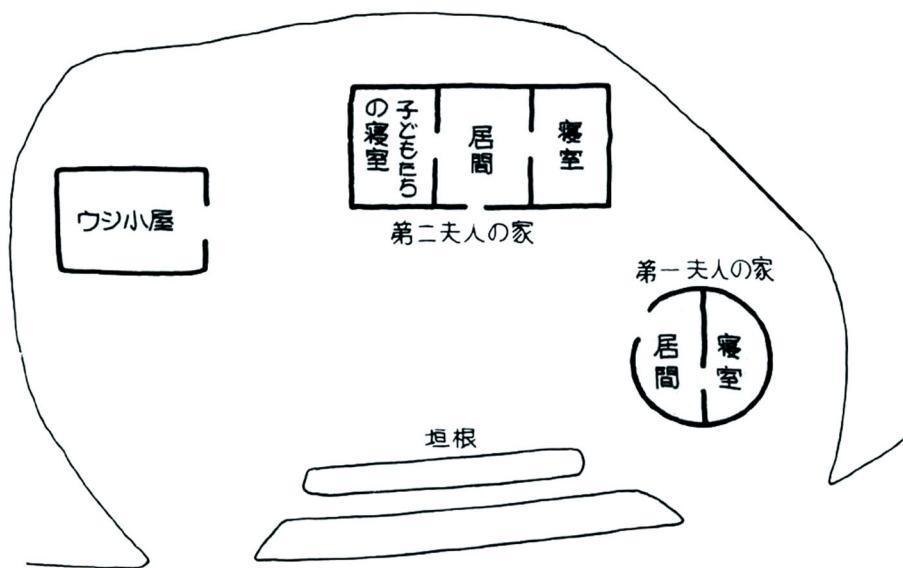
セメントなどを使わずに単に石を積み上げただけ（空積み）の家ならば、王さまの役人が不意に視察にきても、すぐに屋根を壊してやり過ごすことができ、造り直すことも簡単でした。簡単とはいっても住民にとっては大変な苦役でした。しかし、18世紀末まで続いた歴代領主の脱税行為のもと、トゥルッリ造りの技術は進歩しました。

トゥルッリの街アルベロベッロが生まれ、発展し、今日では人類共通の文化としてユネスコの世界遺産にも指定されています。



タンザニア ニャキュウサの家

ニャキュウサの人びとは、東アフリカ、タンザニア南西部の山地、標高500~2000mのところに住んでいます。彼らが住むニャキュウサ・ランドは年間降雨量 2500mm 以上と雨に恵まれ、農耕に適した土地です。家畜としてウシを飼いながら、バナナ、トウモロコシなど 40 種近くの農作物を栽培して暮らしています。



丸い家と四角い家：大きさのちがいはえこひいき!?

ニャキュウサは一夫多妻制の結婚制度をもっており、妻たちはそれぞれ別の家をもっていますが、一家の主人の家はありません。円形の家は四角い家よりも古いタイプです。第1夫人の子供たちはすでに親元を離れ、畑のそばに新しい家を建て、共同生活を始めていますが、第2夫人の子供たちは幼いので家が大きいという想定です。

じょせい いしょう
ニヤキュウサ女性の衣装：カンガ

【カンガとは？】

カンガはタンザニア、ケニアを中心とした東アフリカ（スワヒリ地域）に住む女性に広く着用されています。その始まりは19世紀中頃、海岸部に住む女性たちによって考えられ、広まったといわれています。

【カンガの着かたと 特徴】

カンガは大きさ 1.6m×1.1m 程度の木綿の布です。2枚で1組とするのが基本です。

1枚は胴から下を覆い、もう1枚で上半身を覆ったり、頭に巻いたり、肩にかけたりして使います。同じ柄のものが2枚1組で売られますが、着る時には上下同じ柄でそろえることもあれば、別々の柄を組み合わせることもあります。

巻き方は何通りもありますが、腰に巻きつけるスカートスタイルが多く見られます。また、カンガは赤ちゃんの負ふい紐やゆりかごにも利用されます。日常の服としても、祝い事や祭りのおしゃれ着としてもカンガは活躍します。

プリントされる柄は無数にあり、次々と新しいデザインが出回っています。カンガにはプリント柄のほかに、スワヒリ語の格言やメッセージが記されています。

【カンガから見えるアジアとのつながり】

カンガはタンザニア、ケニアのほかにもインドやマレーシア、中国でもデザインされ作られています。スワヒリ語を使っていない国でスワヒリ語が印刷されているのは興味深いことです。カンガに限らず多くの物がアフリカとアジアを行き来しています。東南アジア諸国（タイ、マレーシア等）では、衣料品、日用雑貨、電化製品などを買い付けに来たアフリカからの交易人の姿が見られます。その中にはニヤキュウサ人の交易人もいます。



南アフリカ ソンデベレの家

アフリカの最南端、^{さいなんたん} 南アフリカ共和国の内陸部、^{きょうわこく} 標高 ^{ひょうこう} 900~1500m の高原地帯に住む民族の家屋です。^{みんぞく} ソンデベレの人びとは、もともとは広大なサバンナでウシやヒツジを飼う牧畜民でしたが、現在では大部分の人がプレトリアやヨハネスブルクといった都市や農場^{のうじょう}で働いています。^{はたら}

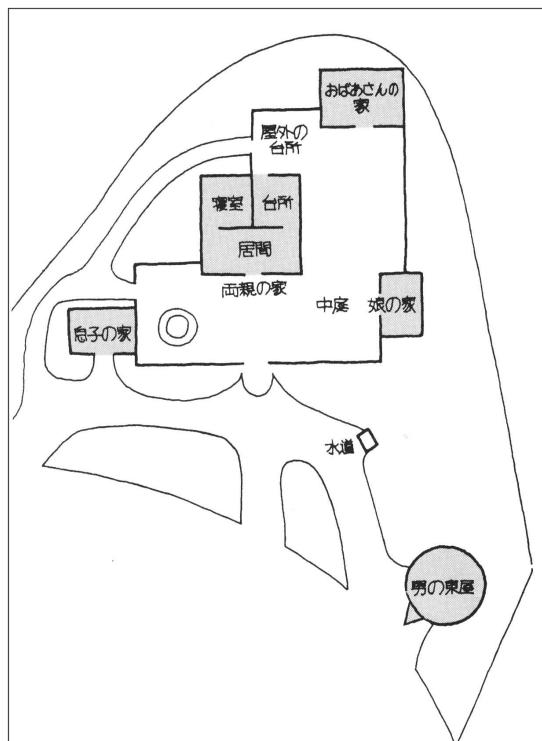
【創出された装飾文化】

ソンデベレは、都会近くに住んでいたため、早い時期から白人文化の影響^{えいきょう}を強く受け、昔ながらの習慣^{しゅうかん}を失い、新たな文化を創り出していった民族です。

色あざやかな幾何学模様^{きかがく もよう}の壁絵^{かへえ}をもつ家や、ガラス製^{せい}のビーズ細工^{さいく}の装飾品^{そうしきひん}をつけ、アクリル製^{せい}のカラフルな毛布^{いしょう}をまとう民族衣装^{きんりん}などは、近隣^{どくしん}の他の民族には見られないソンデベレ独自の文化です。

【壁絵は民族の自己主張】

ソンデベレの壁絵の特徴^{とくちょう}は、あざやかな色を大胆に使った幾何学模様^{きかがく もよう}を左右対称^{さゆうたいしゆう}に配置^{はいち}するところにあります。こうした壁絵は南アフリカだけではなく、世界でも珍^{めずら}しいものです。壁絵は、「ここに住んでいるのはソンデベレです！」という自己主張のあらわれとなっています。



かべ え えが
壁絵を描く女性たち … 2016年の壁絵修復から

壁絵は、女性たちの手によって描かれます。2016年の秋には、南アフリカより来日したンデベレ人女性により、21年ぶりに壁絵が美しく修復されました。このときは最初の復元でも描き手として来日したレアさんをリーダーとして、年齢の異なる4人が協力して作業を進めました。ここでは、簡単に修復の様子をふりかえってみましょう。

①リーダーのレアさんがデザインを決め、壁に軽く粗い線を描きます。次に、線で囲まれた部分に塗る色を少しだけ目印としてつけておきます。使う色に決まりはなく、描き手のセンスで選びます。

②ほかの描き手たちは、目印をたよりに枠内の色を塗っていきます。

塗料は水性ペンキを使います。比較的短時間で乾くため、重ね塗りがしやすい特徴があります。

③粗い線を、太くまっすぐな線へと引きなおします。このとき、定規はいっさい使いません。

④はみ出しありましたり、とちゅうで線の太さが変わってしまったりすると、あとから重ね塗りをして修正します。

輪郭をととのえるのは最年長のローズさんが担当しました。このように細かい部分までこだわった作業によって、壁絵が美しく仕上がりました！



▲目印を描くレアさん（中）と描き手たち

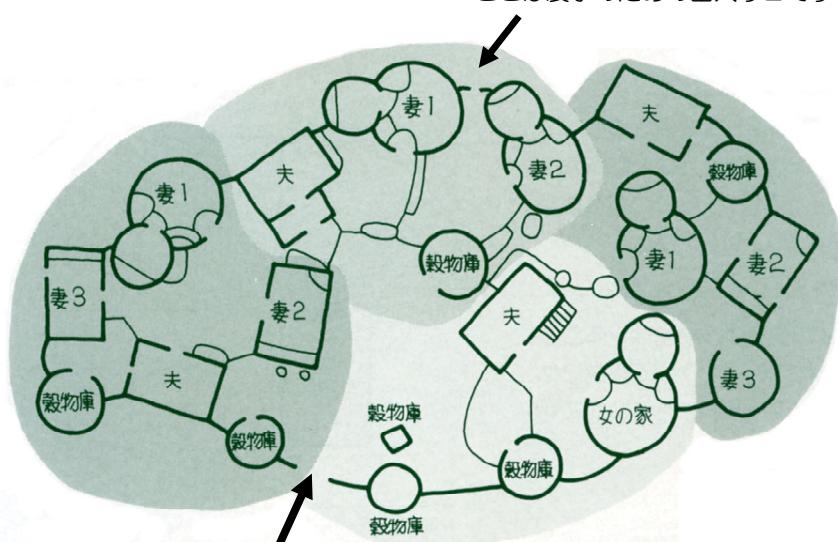


▲線をととのえるローズさん

西アフリカ カッセーナの家

西アフリカの国ブルキナファソのカッセーナの人びとは、サハラ砂漠の南に広がるサバンナ地帯で、モロコシやトウジンビ工等の雑穀を栽培する焼畑農耕民です。一夫多妻制度のもと、同じ屋敷地に血縁関係にある男たちとその複数の妻と子供たちが暮らします。四角い家には男性、ヒョウタン型や丸型の家には（四角い家にも）女性や子供が住みます。壁の幾何学模様を描くのは女性の仕事で、女性たちが好みで模様を決めて描きます。

ここは展示のための出入り口です



こちらが本来の出入り口です。

本来の出入り口は西か南で、
東は悪い力の来る方向とされる。

複数の複婚(一夫多妻制)家族が集住
4人の男とその9人の妻の4世帯

【砦のような屋敷】

建物を土塀でつないで囲んでいるのが特徴です。この地域はかつて近隣の民族間の争いが激しく、敵の侵入を妨げるために、家屋を土壁でつなぎ、屋敷全体を砦のようにしました。平らな屋根は農作物の干し場であるとともに、敵を見張り迎え撃つ所でもありました。

カッセーナ人の“ヒョウタン文化”

【ヒョウタンの使い道はたくさん】

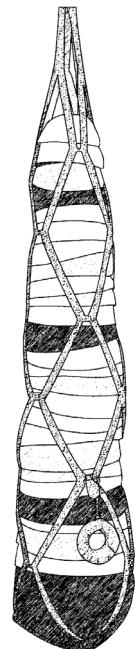
ヒョウタンはアフリカ起源の植物と考えられています。カッセーナ人が住む西アフリカのサバンナ地帯では、野生のもの、栽培されたものなど、形も大きさも色々なものがあります。ヒョウタンは軽く、液体や細かい粉を入れることができ、殻が固く空気を通さないという性質があります。人々はこの性質を最大限に利用してさまざまな使い方をしています。飲み物、食べ物を入れる食器、おたまやひしゃく、ボウル等の調理器具として、収穫した穀物を選り分ける道具、大きなものは洗濯たらいや赤ん坊の行水用に、小さなものは小物入れや畑仕事用の種入れ容器に、他には太鼓の胴や木琴の共鳴器などにも利用されます。

【女性とヒョウタン】

カッセーナの主婦は、ザノと呼ばれるヒョウタンのモニュメントを持っています（右図 参照）。油できれいに磨き上げられた球形または半球形のヒョウタンをいくつも重ねた物を自分の家の中央に吊るして飾ります。いちばん底のヒョウタンの器には、カリテ・バター（アカテツ科の野生樹の実から取る油脂、英語ではシア・バター）が入っています。カリテ・バターは調理、軟膏、石鹼、美容クリームなどに使います。使い続けていくうちにひびが入ってしまったヒョウタンを縫い合わせるのは女性の役割です。少し割れてしまったくらいで捨てることなく、大事に直して使います。女性の生活とヒョウタンは深く関わり合っているのです。

【サバンナのエコな暮らし】

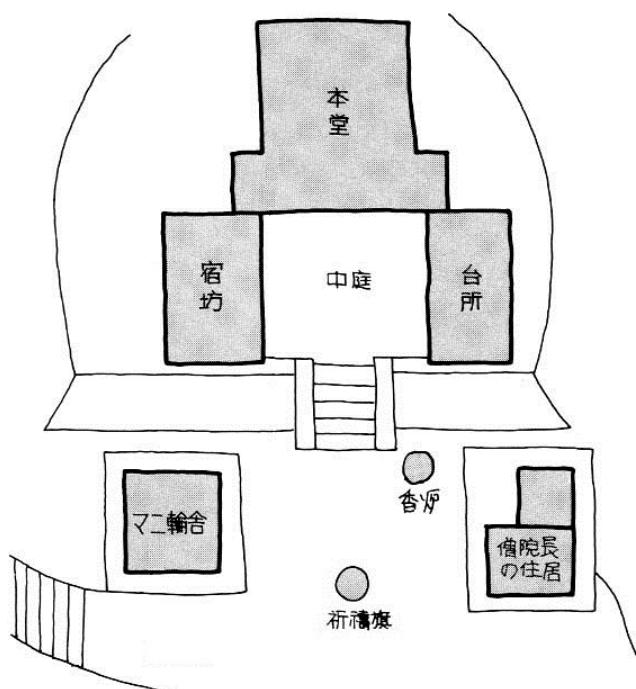
ヒョウタンは道具に加工しやすいように生育途中で人の手が加えられます。収穫した後に形や大きさに合わせて加工され、修理をしながら大事に使い切った後、ヒョウタンはサバンナの土に還ります。このようにヒョウタン製の道具はとてもエコであるとも言えます。サバンナに住む人々は、自然の素材を最大限に活用して暮らしているのです。



ぶつきょうじいん
ネパール 仏教寺院

この展示は、ネパール東部、標高約 3000mのヒマラヤ南腹にあるチベット仏教のニンマ派に属する、タキシンド寺院をモデルに復元したものです。

タキシンド寺院の本堂には釈迦如来を安置し、周囲の壁や天井にはチベット仏教独特の仏画や曼荼羅が極彩色でびっしりと描かれています。敷地内には宿坊やマニ輪舎が建ちならび、現地ではラマ僧が暮らしながら修行に励んでいます。この寺院は、近くに住むシェルパ人（16世紀にチベットから移住し、ヤクの放牧や農耕を営みながら、ヒマラヤ越えの交易にも従事していた人びとで、最近は、登山ガイドとして有名です。）の信仰の中心になっています。



チベット仏教とは

インドにおこった仏教は、7世紀ごろからヒンドゥー教やヨーガなどの影響を受けながら密教として発達しました。その後、チベットに取り入れられ、チベット仏教として今日まで受け継がれています。

◆ 五感を研ぎ澄まして修行する

チベット仏教の大きな特徴は、仏教の究極の目的である悟りの境地を生きた身で得ること（即身成仏）を目指すことです。そのため、真理を頭で理解するだけでなく、知覚、視覚、聴覚に訴えるものを使って修行に励みます。原色で描かれた仏画や曼荼羅、太鼓を鳴らしながら唱える読経などが、その特徴を表しています。曼荼羅は、世界(宇宙)の縮図です。修行僧たちは曼荼羅を目の前に見すえつつ、仏たちが作る世界を自分の心のなかに生み出すため修行に励みます。

◆ さまざまな仏たち

チベット仏教では非常に多様な仏の世界があり、数多くの仏が信仰されています。なかでも五仏(大日如来、阿しゅく如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就如来)と呼ばれる「如来」グループが重要な存在とされています。 *如来：すでに悟りを得た仏。

このほかに、おどろおどろしい姿をして日本人にあまりなじみのない「ヘルカ」と呼ばれる仏もいます。ヘルカは体が青く、象皮をはおり、手に頭蓋骨杯や生首などを持つ恐ろしい姿をしています。元々はヒンドゥー教の神（尊格）です。ほかにも菩薩、女神、護法神と呼ばれる男神も存在します。また、仏ではないが、チベット仏教では「祖師（ラマ）」が非常に重視されます。祖師は宗派の創立者です。

日本の密教は、6世紀中頃に中国経由で伝わり、平安時代初期に空海によって本格的に広まりました。チベット仏教は、インドから直接伝わった密教の流れをくむため、上記に述べたようなインド仏教後期の伝統が色濃く残っています。

ぶっきょうじいん りんねてんしょう
ネパール仏教寺院 一輪廻転生

仏教で生まれ変わりのことを輪廻転生といいます。人は生前の行い(業=カルマ、カルマン)によって死後も別の世界に生まれ変わり、これを永遠に繰り返すという思想です。輪廻転生は、バラモン教から仏教が引き継いでいるものです。同様にバラモン教から発展したヒンドゥー教にも輪廻思想が反映されています。

六道輪廻(バヴァ・チャクラ)は、仏教の根本思想である輪廻転生を表しています。



▲六道輪廻図は、本堂1Fの壁に描かれています。

六道輪廻図には、人間のもつ煩惱の3つの代表である「欲」と「怒り」と「愚かさ」の象徴として、鶏・蛇・豚が描かれています。



「鶏」、「蛇」、「豚」はどこに描かれているのか、よ～く見て探してみましょう！

六道輪廻の世界 — 無限に再生をくり返す

仏教では、すべての生ある物は死後もなんらかの形で存続するという普遍的信念があり、その一つの形態が輪廻転生です。生き物は死後、生前の行いに従ってしかるべき死後の世界に生まれ変わります。この輪廻する世界は、6つあるとされ、「六道」と呼ばれます。六道への生まれ変わりの連続を「六道輪廻」といいます。

- ・「地獄道」：殺生や盗みなどの罪を犯した者が墮ちる恐怖と苦しみの世界
- ・「餓鬼道」：飢えと渴きに悩まされ、栄養失調の餓鬼がいる世界
- ・「畜生道」：動物の住む世界
- ・「阿修羅道」：争いや戦闘が絶えず起きている世界
- ・「人道」：人間界のこと
- ・「天道」：天人が住む世界。「天道」は苦しみのない世界ですが、死後はまた他の世界に生まれ変わることになります。

生前の行いにより生まれ変わる世界が決まり、善い行いをすればよい結果に、悪い行いは悪い結果につながるという「因果応報」とも関係します。

解脱 — どうすれば永遠の苦しみから逃れるのでしょうか

仏教は、「生きていることは、苦しみである」と考えます。そして、輪廻する世界にとどまることは、いつまでも煩惱の世界で苦しみ続けることを意味します。

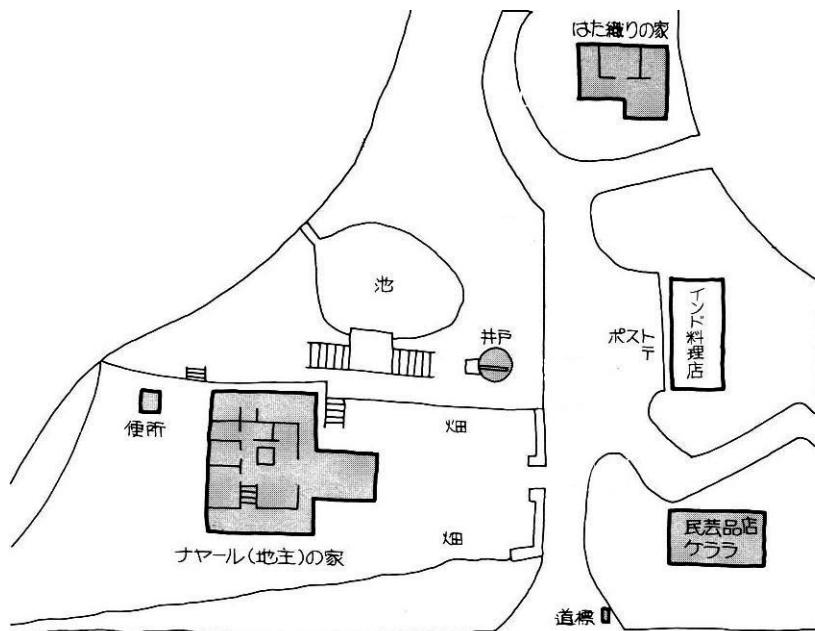
苦しみの原因は悩みや迷いなどの煩惱であり、煩惱をすべて滅すことができれば、輪廻から抜け出すことができます。仏教では、これを解脱といいます。煩惱の束縛から解放されて、永遠の安らぎの境地（涅槃）に至ることが、仏教の究極の目標です。ちなみに、煩惱から解脱し、安樂の境地にいたった存在がブッダです。



印度 ケララ州の村

ここでは南インド、ケララ州のココヤシやバナナなど縁があふれる美しい水田村をモデルに、上級階層（カースト）の家を中心に復元しています。

熱帯モンスーン気候のこの地の年平均気温は 27°C、もっとも気温が低い月でも 26°C もあります。また雨量は、年間 3700mm もあり、リトルワールドが復元している家屋の中で、もっとも雨の多い土地の家です。



【ナマール（地主）の家の壁】

この家の壁はラテライトと呼ばれる素材でできています。ラテライトとは、土の鉄分が酸化してできた熱帯の赤土のこと^{じねし}で、とても固いために建築材料として使われます。

民族衣装：サリーは1枚の布地
まい
ぬのじ

サリーは、インドやネパール、パキスタンなど南アジア地域の女性が着用する民族衣装です。実際、畑で働く女性や都会の〇しなど、多くの女性が着ています。布の一端を肩にかけ、裾を地面すれすれにして歩く姿はとても優雅です。

サリーは長さ6m程度、幅1.2mほどの一枚布。縫い合わせていないという点が大きな特徴で、素材は絹や木綿、化学繊維などです。もっとも高価なのは絹で、晴れ着や結婚式などの儀礼の衣装とされ、木綿製のサリーは値段が安く、普段着とされます。模様は、縞、チェック、唐草、花などさまざまです。刺繡、手描き、木版プリント、かすり、絞りなどの技法でつくられます。

サリーは体形に関係なく選びやすいため、しばしば贈答品に用いられ、重宝されます。そのため、女性は数十枚のサリーを持っていることが一般的なことです。

【サリーの着方】

①布の端を右腰のペチコートにはさんで止め、前から後ろへ回す。

②右手でプリーツを7回ほどとり、ペチコート前面にはさみこむ。

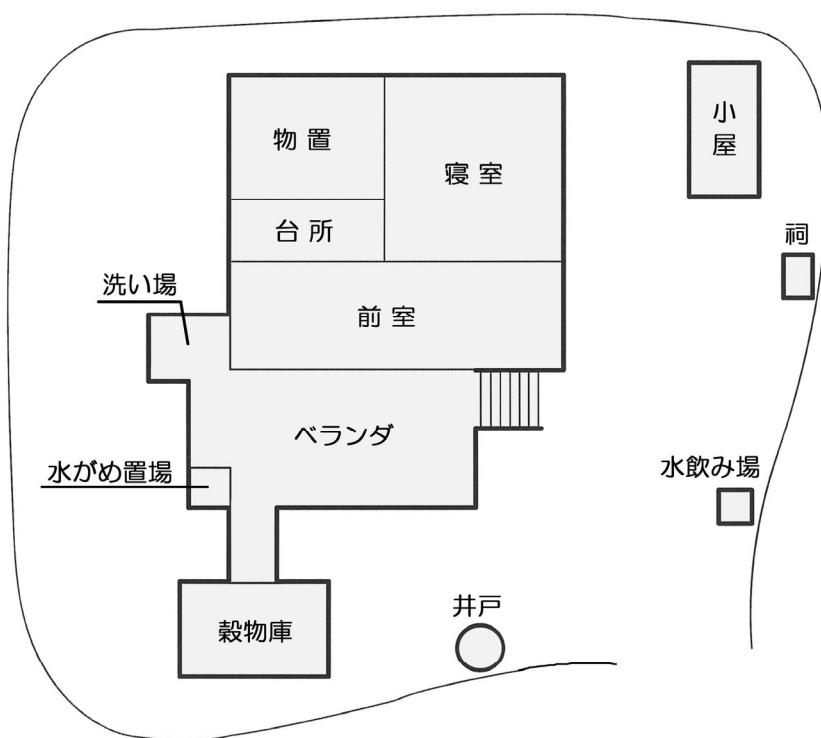
③残った布を再び後ろへ回し、胸から肩にかけて後ろへ垂らす。



サリーは、そぞをたたらしてくるぶしをかくす点が重要で、逆におなかやおへそは露出させてもかまいません。

タイ ランナータイの家

タイ北部の平野にあるランナータイ地方で、水稻耕作をしている人びとの家です。高床の家屋には、食事や作業の場になるベランダと、寝室、かまどのある母屋と穀物庫があります。床下は作業場、物置、家畜小屋として利用されます。

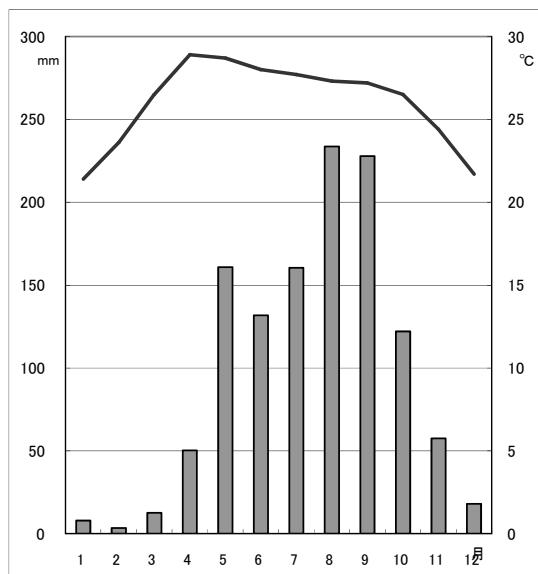


【ランナータイとは】

「ランナータイ」は13世紀の末から20世紀の初めまで、チェンマイを中心とする山間盆地を支配していた王国の名前で、独自の文化や美術、言語などを持っていました。人口の多くはタイ・ユアンと呼ばれるタイ族系の人びとです。

きこう 気候と住まい：暑さと湿気をやりすごす

ランナータイ地方の気候は、季節風によって5月から11月にかけての雨期、11月から翌年の4月にかけての乾期にわかれています。右の降水量をあらわす棒グラフで、雨期と乾期の違いが、はっきりとわかります。年間平均気温は25.9℃もあり、年間を通じて20℃以上となっています。犬山の年間平均気温は15.8℃で、10℃も差があります。



ランナータイの月別平均気温と降水量

【高床式の家屋】

地面からの湿気が屋内に入りにくくするために、床を高くしています。また、床下を風が抜け、涼しくする工夫もあります。さらに、雨期にはたくさんの雨が降り、一帯が水浸しになることもあります。屋内に水が入らないように、高床には洪水対策の役目もあるのです。

【雨対策の屋根】

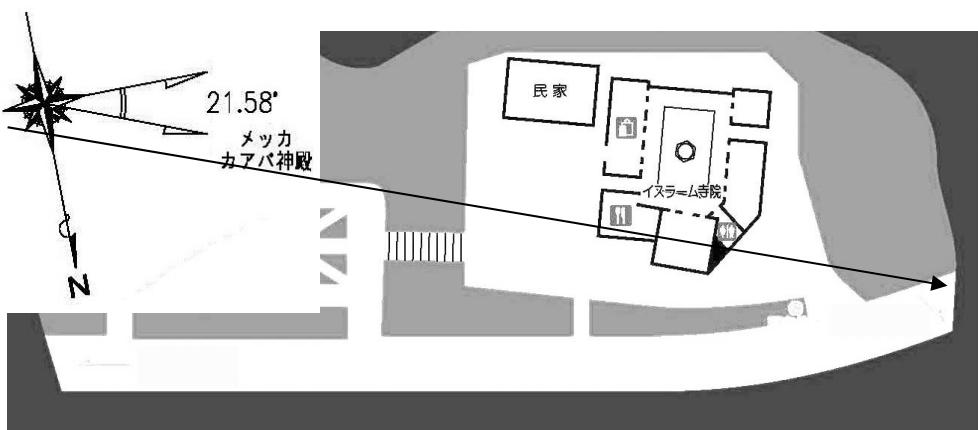
家屋の屋根は雨が多いため、水切れが良いように、薄い素焼きの瓦を葺き、傾斜を強くしています。

【チーク材の家屋】

タイ北部はかつて良質なチーク材の産地でした。チーク材は硬く、耐久性に富むため湿度の高いこの地の家屋の材料としては最適なものでした。

「トルコ イスタンブールの街」^{まち}

古来より文明の十字路として栄えてきた世界有数の大都市、イスタンブール。1600年もの間、いくつかの帝国の首府であった旧市街は、ユネスコの世界文化遺産にも指定されています。ここに復元したイスラーム学院(メドレセ)は、オスマン帝国時代に建設され、今も旧市街にたち活用されている建物をモデルとしています。



【微妙にずれた配置 キブラ Qibla】

周遊路や側溝からみて、家屋が微妙にずれているのをわかりますか？今回の建物の配置の軸は、キブラと呼ばれる方角です。イスラームを信じる人びと(ムスリム)は1日5回の礼拝を義務としています。その礼拝は聖地メッカのカアバ神殿(サウジアラビア)に向かってするものと決まっており、その方向を示すために、復元したメドレセの講義室にもミフラーブというくぼみを壁に設けてあります。このミフラーブのある壁を正確にメッカに正対させるため、厳密に計算して、家屋の配置を少しずらしました。リトルワールドの小さなこだわりです。

メフメット・アーってどんな人？

展示家屋のイスラーム学院（メドレセ）を建てた人、メフメット・アーはオスマン帝国のトプカプ宮殿で、ハーレムを司る責任者でした。ハーレムはスルタン（王、皇帝）のプライベート空間であり、スルタンの妃たちや子どもたちが暮らす場所でもありました。御所でいえば「後宮」、江戸城でいえば「大奥」のようなところです。

この役職の正式名称はダリュッサー・アースですが、親しみを込めてクズラルアースと呼ばされました。クズは「乙女」という意味で、ハーレムに暮らす女性たちをとりまとめる役目からついたそうです。

次の王となる皇太子やその母と常に接し、親身に世話をし、信頼を得なければ務まらない役目です。もちろん、スルタンとも日頃から接する立場ですので、自然と発言権が増し、宮殿の中では、スルタン、大宰相に次ぐ高い地位にありました。

クズラルアースになるためには、いくつかの条件がありました。帝国の中枢を担う人材ですので、頭脳明晰であることは当然です。ハーレムを守るという重要な役目のためには、さらに清廉潔白、品行方正でなければなりません。スルタンの妃たちとの清い関係をはっきりさせるために、ハーレムに務める男たちはみな去勢をした者、宦官でした。

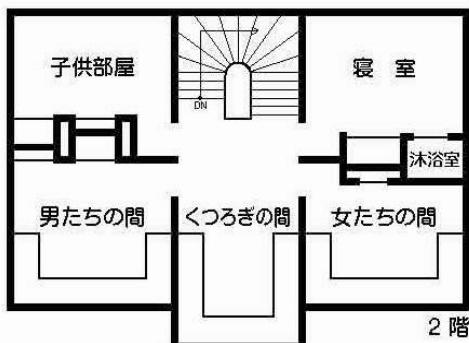
ムスリムは去勢を禁止されているので、異教徒・異民族の少年を去勢して宦官とすることが常でした。メフメット・アーもトルコ人ではありませんでした。彼はアビシニア、今のエチオピア出身の黒人でした。奴隸とされ、去勢され、エジプト経由でイスタンブールに連れてこられる途中で、イスラームに改宗し、頭角をあらわし、出世したのです。

妻子もないメフメット・アーは、宮廷生活で得た財を寄進し、メドレセやモスクやハマムといった、人びとの役に立つ施設をつくったのです。このモデルとしたメドレセ以外の建物もイスタンブールには残っており、人びとの集う場所として活用されています。

「トルコ イスタンブールの街」^{まち}

古来より文明の十字路として栄えてきた世界有数の大都市、イスタンブール。1600年もの間、いくつかの帝国の首府であった旧市街は、ユネスコの世界文化遺産にも指定されています。ここに復元した伝統的民家は今も旧市街にたち活用されている建物をモデルとしています。

展示家屋「イスタンブールの民家」



【家族をつなぐソファとセディル】

くるっと階段を上がった2階が生活空間です。あがりきったところはソファと呼ばれ、2階の各部屋を連結する役目をになう重要な空間です。



ソファに連続して、エイバンというくつろぎの間、もてなしの場があります。マットレスを敷き詰めた作りつけのベンチは、セディルといいます。セディルは、トルコの伝統的民家には欠かせないものです。

民家建築情報

木造3階建て住居（3階部分は屋根裏としており、展示はありません）
建築面積 76.06 m²（約23坪） 延べ面積 146.82 m²（約44.5坪）

かつての高級住宅街の家

復元のモデルとした民家は、19世紀末にスレイマニエ・モスクのそばに建てられたものです。残念ながら、誰が建てた家かは判りません。しかし、近隣にはオスマン帝国の地方の県知事がイスタンブールで宿泊し、客人をもてなすための建物があり、その建築年代も同時期なので、19世紀末当時は高級官僚など富裕層が暮らす住宅街であったと考えられます。

イスタンブールは、7つの丘の上にたつ街といわれていますが、そのひとつがスレイマニエ・モスクのある丘です。見晴らしも良く、風通しも良い丘の上の瀟洒な家屋。この家の持ち主も、それなりの地位の人、そしてそれなりのお金持ちであったと想像されます。

ナザール・ボンジュウ Nazar Boncugu

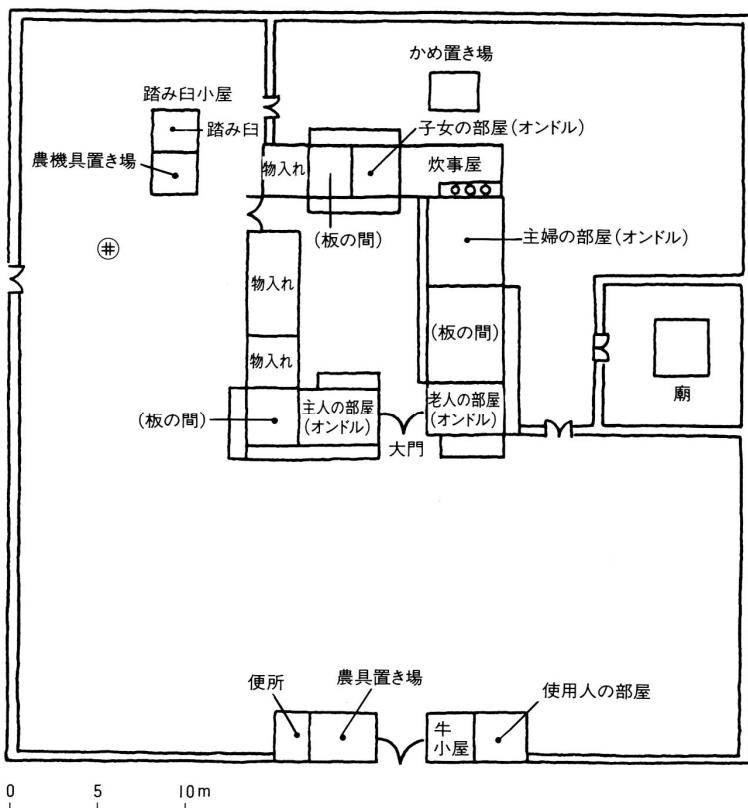
民家の玄関の上には、目玉をかたどった青いガラス玉がかかっています。トルコ語でナザール・ボンジュウというお守りです。ナザールが「目」、ボンジュウが「ガラス玉」を意味し、この家の人たちへの「ねたみ」、「そねみ」、「うらみ」といった悪意をもった視線を避ける、除けるためのものです。この悪意をもった視線を邪視とよびますが、意識して投げる邪視だけでなく、無意識に投げかける邪視もあり、容易に避けることはできません。そうした邪視を避けるために、トルコの人びとは質素な生活を心がけているのですが、どこからこうした悪意を受けるかわからないために、青い目玉のお守りを家の壁にかける習慣をもつのです。



トルコのお土産店「ラーレ」には、いろいろな形のナザール・ボンジュウがあります。ぜひ、ご自分のために、あるいはおみやげに、お求めください。

じぬし 韓國 地主の家

韓国のはば中央部、慶尚北道の山村で、かつての地主（両班）が1937年に建てた家を移築、復元しました。口の字形の母屋には、主人の部屋と主婦の部屋が棟を分けてあります。これは、「男女七歳にして席同じからず」という儒教の教えに基づくものです。



くらべてみよう～見学のポイント

地主の家と農家は、慶尚北道の同じ村に建っていたものです。家のつくり、材料、広さなどからさまざまな違いを見るすることができます。2つの家をくらべて、どこが違うのか・どうして違いができるのかを考えてみましょう。

かい てき きょしつ
快適に住まう：季節に合わせた居室

部屋の床には、土間、オンドル床、板床の3種類があり、土間は物置に、オンドル床と板床は居室に使います。オンドル床の間は、熱を逃がさぬように寒さ対策をこらした冬用の部屋で、板床の間は少しでも風が入るように暑さ対策をほどこした夏用の部屋です。

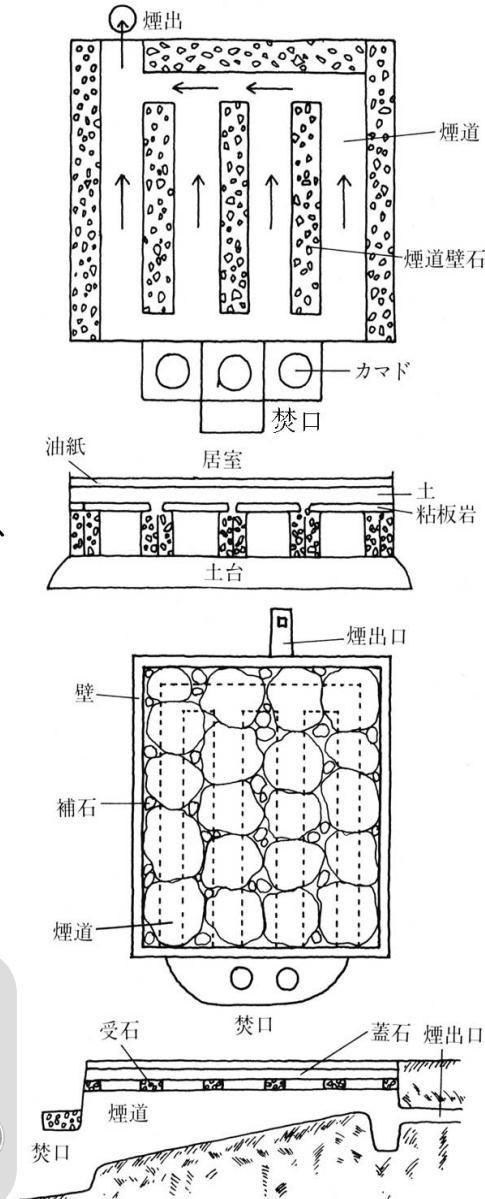
オンドル 一冬用の床暖房

オンドルとは床暖房のことです。
床下に石を並べて数本の溝をつくり、この溝の天井に平らな石を置き、煙の通り道とします。天井の石の上に粘土を叩いて平らにし、その上に紙を貼り、さらに油のついたオンドル紙を貼ります。

溝を通った煙が石と粘土と紙を通して床に熱を伝えます。煙を発生させる焚口と、トンネルを通った煙が出ていく煙突の間の勾配のつけ方が難しく、それにより床の暖かさが違ってきます。

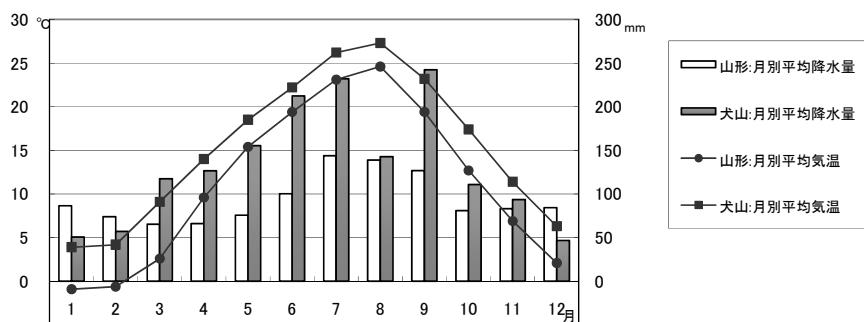
オンドル床の間と板の間では、床のほかにもそれぞれの季節に合わせた工夫がほどこされています。どんな工夫があるかさがしてみましょう。

ヒント：天井/かべ/とびら



がっさんさんろく 山形県 月山山麓の家

豪雪地帯の出羽山地、月山の麓、月山沢に、1767年に建てられた中門づくりの養蚕農家を移築しました。月山沢は1976年にダム建設のため廃村となり、水没しました。



きこう 気候と住まい：雪とともに暮らす冬

おもてめん 表面のグラフをみると、12月～2月にかけて、山形月山山麓の方がここ大山よりも月別平均降水量が多くなっていますが、その多くは雪です。冬のあいだ、3～4mもの雪が月山山麓では積もります。

【中門づくり】

曲がり屋の一種で、日本海側の豪雪地帯に特徴的な建築様式です。どま土間の手前にある大戸が家の入口で、中門は雪を払ったり、農具などの物置きとして使われ、屋内の暖気を逃がさない工夫です。冬の間は、中門の外に“雪口一カ”と呼ぶ突出部を設けます。

【雪囲い】

深雪地帯では、冬になるとカヤやムシロで家を囲みます。これを雪囲いといいます。これは寒さ対策であるとともに、雪が家にくっついて押しつぶさないようにという工夫です。

【明かりとりの障子窓】

雪囲いは障子の上の鴨居あたりまでおおうため、家の内部は薄暗くなってしまいます。そのため、軒をできるだけ高くあげ、その壁に窓を設けて、採光口とします。

【板壁】

土壁は雪に弱く、崩れてしまうので、板壁とします。

【重さ対策】

雪の重みに耐えるように、太くてがっしりした木材を柱や梁に使います。

【雪おろし】

“雪ぼり”といい、ひと冬に6、7回は屋根に登って、雪を融雪池に落とし、水を流して溶かします。

【道踏み】

冬、子どもたちは朝起きると、カンジキをつけて、まず道踏みをします。毎日のように、一日に何回もします。

